

平成 29 年度「FD 推進助成（乙）事業」事業報告及び成果報告会資料一覧

根岸 毅宏 教授

藤本 頼生 准教授

成田 信子 教授



## 平成29年度「FD推進助成（乙）グループによるFD推進事業」報告書

標記のことに関し、以下のとおり報告いたします。

学部名	経済学部
事業名	アクティブラーニング型授業における教員と学生との間の教育成果のギャップの確認およびルーブリックの作成
申請者氏名（所属／職名）	根岸 毅宏（経済学部／教授）
<b>事業の概要</b>	
<p>以下、<u>本年度実施した推進事業の概要</u>について、年初の「グループによるFD推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」「役割分担」を参照しつつ、具体的に記入してください。</p> <p>●目的 アクティブラーニング型の授業を实践する「経営学特論（ビジネスデザインⅠ）」（前期）と「経営学特論（リーダーシップ）」（後期）を対象に、次の4つを行うことである。</p> <p>(1) 「教員が期待する学習成果」と「学生が自己認識する学習成果」とのギャップの有無を確認する。</p> <p>(2) 学習成果を実現するためのルーブリック（評価基準）を開発する。</p> <p>(3) ルーブリックの開発について外部支援を受ける。</p> <p>(4) 教育手法の改善として、「コーチング」手法の講習を受ける。</p> <p>●目的を実現するための4つのプロジェクト。</p> <p>(1) 「経営学特論（ビジネスデザインⅠ）」の受講生による学習成果報告書の作成。</p> <p>(2) 「経営学特論（リーダーシップ）」の受講生による学習成果報告書の作成。</p> <p>(3) 外部支援を受けながら、上記2つの科目のルーブリックの作成。</p> <p>(4) 教員の教育手法を改善するコーチング研修。</p> <p>●4つのプロジェクトの関係</p> <p>第1に、2つの学習成果報告書を使って学生の学習成果を質的に確認し、担当教員の間で共有する。</p> <p>第2に、ルーブリック作成の際に、①シラバス、②教員が考える学習目標、③上記の学習成果報告書から抽出した学生の学習成果を、外部委託者と共有する。</p> <p>第3に、次年度のルーブリックの運営も視野に入れて、教育スキルを改善するコーチング研修を行う。</p> <p>●役割分担</p> <p>・4つのプロジェクトの統括を、研究代表者である根岸が行った。</p> <p>・その上で、(1)の編集を矢嶋、(2)を根岸、(3)と(4)を齋藤を担当し、特に齋藤は外部委託業者と連絡を取りながら、スケジュール通りに、プロジェクトを進行し、成果物も完成させた。</p>	

## 事業の結果

【目的】年初計画で設定した目的は達成できましたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック）

十分達成できた（できる） 若干の計画修正の上達成可 大幅な修正の上達成可 達成できない

【内容】年初計画で設定した事業内容は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【計画】年初の計画は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【役割分担】年初計画で設定した役割分担は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【点検・評価・共有】点検・評価を行い、その結果をグループ全員で十分に共有・検討しましたか？

十分な点検・評価・共有ができた 一定の点検・評価・共有ができた

点検・評価・共有のどれかが不十分であった 点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

以下、本年度実施した推進事業の結果について、年初「グループによるFD推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」「役割分担」「点検・評価」及び上記でチェックした自己評価に照らして（特に【点検・評価・共有】については必ず言及）記入してください。

●本事業の目的を実現するために4つのプロジェクトを計画したが、すべてのプロジェクトで計画通りの成果物を完成させることができた。

- (1) 「経営学特論（ビジネスデザインⅠ）」の受講生による学習成果報告書。
- (2) 「経営学特論（リーダーシップ）」の受講生による学習成果報告書。
- (3) 上記2つの科目のループリックの完成。
- (4) 教員の教育手法を改善するコーチング研修。

●成果物の作成プロセスにおける【点検・評価・共有】について

第1に、2つの学習成果報告書については、各教員が学生の学習成果を読んで共有している。

第2に、ループリック作成プロセスでは、外部委託業者における授業見学、外部委託業者を交えた3回のミーティング（1回に2時間）において、現状を点検・評価・共有している。

第3に、コーチング研修では、前期と後期ともに、2回の研修、1回の授業見学（後期は第15回目の授業が雪で休講になったので実施できなかった）、1回の個別面談での振り返りを行い、各教員の成果評価を共有することで、現状を点検・評価・共有した。

●成果物（FD活動の成果）の【点検・評価・共有】について

第1に、2つの学習成果報告書を、次年度までに教員が読むことで共有する。

第2に、ループリックの授業での運用について、次年度の授業までに2回のミーティングを行い、次年度の授業開始後は、週に一度、授業前に、授業内容をループリックに照らし合わせてどのように評価するのか、ミーティングを開催する。

第3に、コーチング・スキルの実践は、「経営学特論（ビジネスデザインⅠ）」は3名の教員が、「経営学特論（リーダーシップ）」は2名の教員が担当するので、ピア・レビューの形で、ビデオ撮影とそれらの鑑賞のように、教員間の相互チェック機能を働かせたい。

## 今後の展望

【改善】本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

とても効果的である 効果的である あまり効果的でない 効果的でない (いずれかにチェック)

効果的である(ない)と判断した理由を、具体的に述べてください。

本事業の成果である以下の2つが、授業改善と教授法の改善に効果的である。

(1)ルーブリックの作成が授業改善に効果的である。なお、このルーブリックを作成する上で、「経営学特論(ビジネスデザインI)」と「経営学特論(リーダーシップ)」の学習成果報告書は、大いに役立った。

第1は、ルーブリックを作成するプロセスで、本授業の教育目標を共有したことである。

第2に、ルーブリックを用いた成績評価ができるように、授業内容がルーブリックの項目を反映しているのか、授業内容を極めて精緻に精査することになったことである。

第3に、ルーブリックを網羅した成績内容を実施した場合に、教員が個々の学生にルーブリックをあてはめて成績評価できるのか、改めて教員が授業で行うべきこともしくは教員が身につけるべきスキルを考え直すきっかけになることである。

なお、これは、次年度に授業を行いながら、考えるしかない。

第4に、実際の授業を通じてルーブリックを見直すことで、将来的に、より授業の到達目標を反映したルーブリックができると見込めることであり、これは同時に、授業内容の改善につながることである。

(2)コーチングの研修が教授法の改善に効果的である。

第1に、担当教員が、研修で傾聴力、質問力、フィードバック力を学び、授業で実践する様子をコーチが見学し、各教員にフィードバックする機会を作り、実践的な教育スキルを身につけることができた。

第2に、FAも参加した研修の際に、参加者それぞれのコミュニケーションスタイルをタイプ分けすることがあった。それにより、人それぞれタイプが異なり、得意・不得意があることを学んだ。これは、アクティブラーニング形式の授業で、積極的に参加しない学生、教員から見ると苦手な学生やついイラっとする学生も、そうしたタイプの学生がいることが認識できると、寛容になることができるようになった。

第3に、コーチング研修で学んだスキルを、コーチが授業見学して評価してくれたので、単に研修を受けただけでなく、その実践方法についてもアドバイスしてもらえた。

第4に、個別面談により、教員自身の研究で設定した目標、その実践と到達度について、実践的なアドバイスをもらうことができた。

【経費の執行】経費の執行は、当初の執行計画に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？

本年度の経費の執行状況について、執行計画に基づき、中間報告の前後に分けて記入してください。

●経費は、概ね当初の予定通り執行できた。

・中間報告前

中間報告の前までは、計画通りに進んでいた。

・中間報告後

前期の「経営学特論（リーダーシップ）」の受講生による学習成果報告書について、授業終了後に、受講生に自身が書いた文章に修正を依頼しても、すぐに返信が来なく、修正した文章を集めることに四苦八苦した。この教訓を活かし、後期の「経営学特論（リーダーシップ）」では、授業終了前に、受講生の文章を集めた。


なお、謝金（アルバイト）が余ったが、1万円程度とわずかであった。

【成果報告会】成果報告会の内容（説明事項、共有事項、問題提起等）について現時点での概要をお書きください。

報告会では、本事業の目的を実現するための4つのプロジェクトの概要を述べた。

- (1)「経営学特論（ビジネスデザインⅠ）」の学習成果報告書では、学生の成長が確認でき、その成長が5つに分類できることを示した。（※詳しくは、報告会の資料を見て欲しい。）
- (2)「経営学特論（リーダーシップ）」の学習成果報告書では、リーダーシップというものが学習して身につくことが確認できた。授業では、理論を説明し、実践するグループワークをしているが、受講生はそれを授業外で実践し、身につけようとしているのである。
- (3) 上記2つの科目のルーブリックの完成する中で、ルーブリックに基づいて、授業計画を立て、それを実現できるように授業内容を組み立てることの重要性を再確認した。このルーブリックが学生の成績評価として使えるのか、また教員はそれを学生を評価する基準として運用できるのか、次年度、確認したい。
- (4) 教員の教育手法を改善するコーチング研修出見に付けたスキルを、ルーブリックを用いて受講生を評価する際に活用できるように、教員間で相互に、スキルの活用状況を共有、評価しながら進める。


1





## アクティブラーニング型授業における教員 と学生との間の教育成果のギャップの確 認およびルーブリックの作成

根岸毅宏・齊藤光弘 with 矢嶋剛

もっと日本を。もっと世界へ。

 國學院大學

 國學院大學



## 大きな課題

- 対象  
アクティブラーニング型の授業
  - ①「経営学特論(ビジネスデザイン)」
  - ②「経営学特論(リーダーシップ)」
- 大きな課題
  - ①授業成果(ギャップ)の確認
  - ②教育内容の改善

2



## ●大きな課題

- ①授業成果(ギャップ)の確認  
→ 報告書の作成  
(学生が実感している授業の成果)
  
- ②教育内容の改善  
→ コーチング研修  
ルーブリックの作成

3



## 課題と役割

1. ビジネスデザイン  
→ 新書(214頁)
2. リーダーシップ  
→ 新書(120頁)
3. ルーブリックの作成  
→ ミーティング3回、授業見学2回
4. コーチング研修  
→ 前期・後期 各 研修2回+個別面談+授業見学

4



## 大きなFD成果



- ・授業内容：正しい方向であることを認識
- ・到達目標：文章化、共有化
- ・到達目標の実現：教育スキルの習得

5

## 今後の課題



- ・ループリックの運用
  - 到達目標に沿った授業評価ができるのか？
- ・コーチング
  - 授業の中で実践できるか？
- ・授業成果の確認
  - 何年後に行うのか

6

もっと日本を。もっと世界へ。



Copyright (c) Kokugakuin University. All Rights Reserved.

渋谷キャンパス

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

たまプラーザキャンパス

〒225-0003 神奈川県横浜市青葉区新石川3-22-1

## 経営学特論 ( ビジネスデザイン I ) の報告

### 内容と学生の成長した瞬間

経済学部 兼任講師 矢嶋 剛

## 経営学特論 ( ビジネスデザイン I ) の特徴

### カリキュラム上の特性

- ・ A L ( アクティブラーニング ) 型
- ・ グループワーク主体
- ・ 教員と F A が受講生を支援
- ・ 企業が課題を提供  
( 平成29年度は、ギャップジャパン(株)様 )
- ・ 「正解のない」を考える
- ・ 企業での最終報告会

### スケジュール ( 全15回 )

- 4月 課題提供企業の実態を調べる、ファクトブックの制作 ( グループワーク① )
- 5月 企業からの課題を発表。課題解決施策を創るグループワーク②を開始。
- 6月 企業訪問、施策の中間発表
- 7月 クラス予選を経て、企業での最終報告会  
その後の授業で、振り返りをして終了。  
※受講者54名が14チームに分かれ、  
うち6チームが最終報告に臨んだ。

報告書『経営学特論 ( ビジネスデザイン I ) で受講生は何をつかんだか』4-12ページ

## 平成29年度の課題

今日の日本/世界における社会環境の変化を整理し、

『デニムフライデー』キャンペーンの促進/障害となる要因について  
明らかにした上で、本キャンペーンを広く展開し、普及するために  
取るべき施策と期待される成果について明らかにしなさい。

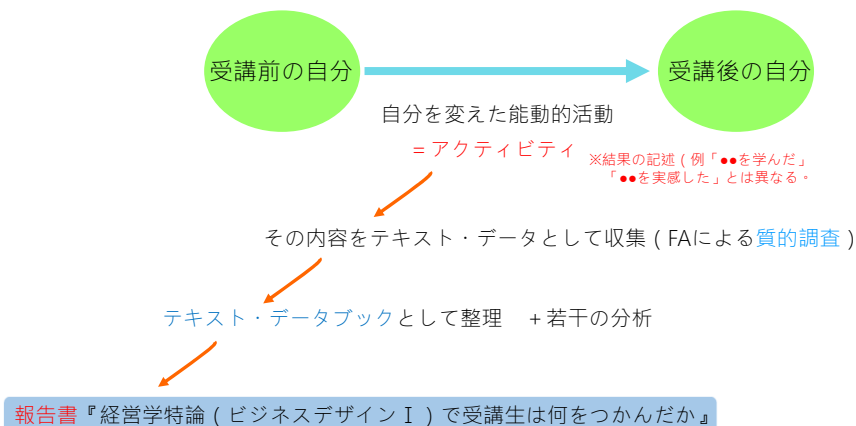


出所: デニムフライデーイベントページ  
[https://www.gap1969.jp/about\\_gap/denim\\_friday/](https://www.gap1969.jp/about_gap/denim_friday/)

経営学特論 ( ビジネスデザイン I ) 講義資料より

教育効果の観察⇒ アクティビティを考察の対象とする

アクティビティとは



## 受講生のアクティビティ・マップ



報告書『経営学特論 ( ビジネスデザイン I ) で受講生は何をつかんだか』15ページ

## 注目すべきアクティビティ ( 事例 )

### 「§4 能力を身に付けた」 より

一通り意見の拡大が収まったところで、私は、リーダーたちに足りない部分を探し出し、そこを埋めていった。今の②~④は「デニムを履く」で括れる。だからどんな人がデニムを履くのか考えようと提案した。すると議論が動き出す。

### 「§5 認識を新たにした」 より

その後の私に触れる。良くも悪くもこだわる私は、自分の担当に最後までとことん向き合った。最終発表が出来ないと決まった後も、改善の余地を個人的に直した。今でも有用な資料を見つけると、あの時に出会えていたらと考えてしまう。

報告書『経営学特論 ( ビジネスデザイン I ) で受講生は何をつかんだか』75及び89ページ  
注) 報告書には、32名のアクティビティが掲載されている。

## 今後の課題

①効果的なアクティビティは、能動的教育の目標になり得る

[ アクティビティは、受講生の到達点を示唆している ]

②アクティビティのデータは、教育効果の基礎資料になる

[ 今回の報告書は、パイロット・スタディになるかもしれない ]

③國學院大學の学生のアクティビティを知ることは  
次を考える上で、よい刺激となる。

以上で、報告を終わります



## 経営学特論(リーダーシップ)の報告

根岸毅宏

もっと日本を。もっと世界へ。

 國學院大學

## 授業の概要



・**授業内容**: 次の2枚のスライド  
理論(講義)と実践(ワーク)  
(授業外での実践を宿題)

・**対象**: 主に、1年生(FA候補者 23人)  
学部を牽引(20%・100人)



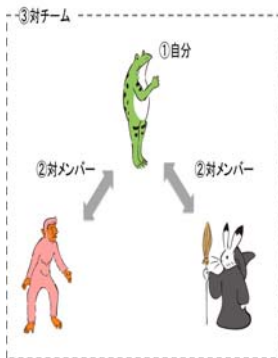
### 本授業で考えるリーダーシップとは？

#### シェアド・リーダーシップ！！ (共有型)

「役割や権限に関係なく、それぞれの立場や関わり方から、リーダーシップを発揮しているような状態」

「職場やチームの目標を達成するために他のメンバーに及ぼす**影響力**」(石川 2016)

### 本授業で考えるリーダーシップ行動とは？



#### ① 自分

##### 自分の行動を促す！

- モチベーション
- 不安や恐れ、弱みと向き合う
- (失敗を恐れることと共にある力)
- ...

#### ② 対メンバー

##### 相手を理解し、働きかける！！

- 傾聴力
- 質問力
- 論理的思考力
- 伝える力

#### ③ 対チーム

##### 方向性を指し示す！！！！

- ファシリテーション力
- チームワーク
- ストーリーテリング
- ...



## レポート作成の基礎的課題



### ①開始時

授業を受けて獲得したいリーダーシップ像とその理由

### ②中間時

a) 獲得したいリーダーシップ像を手に入れることができたか？

b) 獲得したいリーダーシップ像が変化したか？

### ③終了時

獲得したいリーダーシップ像を手に入れることができたか？

### ④目標としたリーダーシップ像の授業以外での実践例

5

## 成果①： レポートから確認



### ①授業外での実践の確認

→ リーダーシップは教えて身につく

### ②自ら課題を見つけて、課題の克服を行う

→ 学生がPDCAサイクルを回しているように見える

### ③成長を実感している

6



## ①授業外での実践の確認 → リーダーシップは教えて身につく

・獲得したいリーダーシップ像に近づく

- みんなが意見を気軽に出せる環境をつくる
- 組織の中の個人個人が全力を発揮することができる
- 目標を達成するために他のメンバーに及ぼす影響力
- やる気のない人を巻き込む
- 周りをしっかりみていて、失敗を恐れずに行動する

7



## ②自ら課題を見つけて、 課題の克服を行う

学生がPDCAサイクルを回しているように見える

- 基礎演習B
- アルバイト
- サークル
- 友達

8



### ③成長を実感している

- この授業で学んだ傾聴力はとても役に立った
- 率先してやることで、他の人も無理なくついてきてくれる
- 自分自身の内面の問題を人に話せるようになった
- 理想のリーダーシップ像に近づくことができた
- 互いに信頼関係を築きながらチームワークが高まった
- 

9



レポート課題から確認された成果も、  
→ ルーブリック作成に反映された

10

## 補足 成果② 授業を通して



- ①FAの成長(立教大学BLPのSAモデルの取り入れ)
  - 授業後半から授業の司会をFAが勤める
  - 授業改善案をFAから提案する
- ②ロールモデルとしてのFA(基礎演習への波及)
  - 授業に積極的に関わるFA像
- ③このロールモデルが、受講生の目標になると、
  - 積極的な学生の具体像

もっと日本を。もっと世界へ。

 國學院大學

Copyright (c) Kokugakuin University. All Rights Reserved.

渋谷キャンパス  
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

たまプラーザキャンパス  
〒225-0003 神奈川県横浜市青葉区新石川3-22-1

『経営学特論：ビジネスデザイン I/  
リーダーシップ』における授業目標の明確化と  
教育スキルの習得に関する取り組みについての報告

経済学部 特任助教 齊藤 光弘

## 発表の構成

本報告では、下記2点について発表する。

1. 今後の授業目標の明確化

⇒学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる  
表として示した『ルーブリック』の作成

2. 教育スキルの習得に関する取り組み

⇒学生への傾聴・問いかけを重視した  
『コーチングスキル』の醸成

## 発表の構成

本報告では、下記2点について発表する。

### 1. 今後の授業目標の明確化

⇒学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表として示した『ルーブリック』の作成

### 2. 教育スキルの習得に関する取り組み

⇒学生への傾聴・問いかけを重視した『コーチングスキル』の醸成

## (1) 今後の授業目標の明確化：目的

取り組みの  
目的

「教員が期待する学習成果」と  
「学生が自己認識する学習成果」との  
ギャップを少なくし、期待する学習成果を  
実現するための『ルーブリック(評価基準)』の作成

(1) 今後の授業目標の明確化：取り組み内容

取り組みの内容

- 外部支援者であるand seeds 社のサポートを得ながら、学習の到達度合を数段階に分けて記述し評価の目安とするルーブリックを作成した。
- ルーブリックの作成にあたっては、and seeds 社が、
  - ①シラバスの確認、
  - ②授業見学、
  - ③ルーブリックの作成に関するワークショップの実施を行った。

(1) 今後の授業目標の明確化：取り組み内容

■and seeds社からサポートを受け、下記の内容に取り組んだ。

MTG①  
12月6日

- ルーブリック作成の目的について共有
- and seeds社が各担当者にインタビューし、習得を期待するスキルや知識に関するビジョンを文言化

MTG②  
12月20日

- 前回確認した、授業を通じて習得を期待するスキルや知識に関するビジョンの背景について確認
- ルーブリックの項目案出し

MTG③  
2月7日

- 評価尺度・観点の最終確認
- 活用にあたってのルール作り

授業見学

and seeds 社は、7月24日に『ビジネスデザイン』について授業見学を行った。12月20日に『リーダーシップ』について授業見学の予定だったが、降雪のため休講となった。

## (1) 今後の授業目標の明確化：成果物

### ■『ビジネスデザイン』に関するルーブリックは下記の通り。

No	評価観点	ウェイト (全100%)	評価尺度		
			要再学習	良	優秀
1	情報収集	20%	・課題を解決する上で必要な情報を集めておらず、収集源もインターネットだけに偏っている。	・課題を解決する上で必要な最低限の情報を、論文や書籍、インターネット等から収集できる。	・課題を解決する上で必要な情報を、論文や書籍、インターネット等から幅広く収集し、複数の情報源から多面的に情報を収集している。
2	課題設定と解決策の検討	25%	・与えられたテーマに対して、課題とその原因についての理解・把握が表面的で、解決策も特定している原因とは、ずれたものになっている。	・与えられたテーマに対して、課題とその原因について自分なりに納得感がある設定ができ、適切な解決策を検討できる。	・与えられたテーマに対して、企業が置かれている事業環境も見ながら、より本質的な原因にも言及した課題設定と、経済合理性/実現可能性が高い解決策が検討できる。
3	プレゼンテーション	15%	・熟考が足りず、自分たちのアイデアや想いが、何(What)をどうする(How)という形で、資料に十分に反映されておらず、聴き手は内容を理解しにくい発表となっている。	・自分達のアイデアや想いが、何(What)をどうする(How)という形で、適切に反映された資料を作成し、聴き手に必要最低限の内容を伝えられる発表ができる。	・自分達のアイデアや想いを、何(What)をどうする(How)という形で伝えるだけでなく、資料の見やすさやストーリーにも留意しながら、聴き手に訴えかける発表ができる。
4	チームメンバーとの協働	25%	・チームメンバー間で共通の目的意識を設定した上で、主体的に自ら進んで他者に働きかけるグループワークができない。	・チームメンバー間で共通の目標を設定し、主体的に自ら進んで適切なコミュニケーションや必要な作業に臨みながら、グループワークができる。	・チームメンバー間で共通の目標を設定するとともに、他のメンバーに対して積極的に働きかけ、助言や支援を行いながら、作業を支援するとともに、動機付けも行いながらグループワークができる。
5	経営分析に関する専門知識の習得	15%	・経営分析に関する専門知識(フレームワーク)等に関する理解が不足しており、分析の仕方が間違っている。	・経営分析に関する専門知識(フレームワーク)等を適切に理解し、本授業で取り扱う事例において適切に当てはめながら分析できる。	・経営分析に関する専門知識(フレームワーク)等をより深く理解し、本授業で扱う事例に限らず、実社会の企業活動にも応用的に当てはめ、分析することができる。

## (1) 今後の授業目標の明確化：成果物

### ■『リーダーシップ』に関するルーブリックは下記の通り。

No	評価観点	ウェイト (全100%)	評価尺度		
			要再学習	良	優秀
1	ファシリテーション	25%	・グループで議論する際に、テーマの再確認がなされておらず、話が深まらない/または、脱線してしまう。	・グループで議論する際に、テーマを再度確認し、適切な議題設定をした上で、みんなの意見を引き出している。	・グループで議論する際に、適切な議題の設定をし、みんなの意見を引き出し、そこからグループとしての意見を構造的に取りまとめたり、より抽象化した新たな学びや気付きを導き出している。
2	コミュニケーション	30%	・他者に対して、自分の意見を伝えたり、傾聴や質問といった働きかけができない。	・他者に対して自分の意見を伝えたり、傾聴や質問を用いながら、適切なコミュニケーションができる。	・他者に対して自分の意見を伝えたり、傾聴や質問を用いながら、表面的な言葉のやり取りだけでなく、その奥にある想いや感情にもついても、聴くことができる。
3	振り返り	25%	・自分自身の経験は羅列できるが、そこから学びや気づきを抽出(意味付け)できない。	・自分自身の経験を振り返りながら、経験した事実を基に、学びや気づきを抽出(意味付け)できる。	・自分自身の経験を振り返りながら、経験した事実を基に、学びや気づきを抽出(意味付け)し、次に必要なアクションを明確に意識/実践できている。
4	シェアド・リーダーシップに関する知識の習得と実践	20%	・シェアド・リーダーシップの概念に関する理解が不足しており、他人に説明ができない。	・シェアド・リーダーシップの概念に関して十分に理解しており、他人に説明ができる。	・シェアド・リーダーシップの概念に関して十分に理解するとともに、自分なりの強みや課題も意識しながら、シェアド・リーダーシップを実践している。



(1) 今後の授業目標の明確化：取り組みの成果

1. 学生に習得を期待するスキル・知識を文言化し、見える化することで、学生・教員間での期待にギャップが生じにくくなる。
2. ルーブリックを作成するプロセスにおいて、各教員が持っている学生の成長イメージを共有したことで、お互いの教育観の理解が進み、コミュニケーションがより円滑化しやすくなった。
3. 授業における到達目標が明確化したことで、各回の授業づくりにおいても、どのような内容を含めるべきか、到達目標に資する内容になっているかの確認が容易になった。

(1) 今後の授業目標の明確化：今後の展開

- 今年度作成したルーブリックを用いて、来期は、実際に授業作成や学生の評価、授業後の振り返りにおいて、運用に取り組んでいく。
- 実際の運用の中で、よりブラッシュアップが必要となる。  
現在は、3段階での評価であるが、場合によっては、評価段階の詳細化や評価項目の入れ替えについても、検討を進めていきたい。

## 発表の構成

本報告では、下記2点について発表する。

### 1. 今後の授業目標の明確化

⇒学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表として示した『ルーブリック』の作成

### 2. 教育スキルの習得に関する取り組み

⇒学生への傾聴・問いかけを重視した『コーチングスキル』の醸成

## (2) 教育スキルの習得：目的

### 取り組みの 目的

教育手法を改善するために、担当教員の傾聴力や質問力、フィードバック力を向上させる、  
コーチング講座を実施する。

※『コーチング』とは、傾聴・質問を用いながら、  
対象者(学生)の行動に対する主体性を促す  
スキル。

## (2) 教育スキルの習得：取り組み内容

### 取り組み内容

- ・ ルーブリックと同様に、外部支援者としてand seeds 社のサポートを得ながら、前・後期合わせて全4回のコーチング研修と、事後評価のインタビューを実施した。

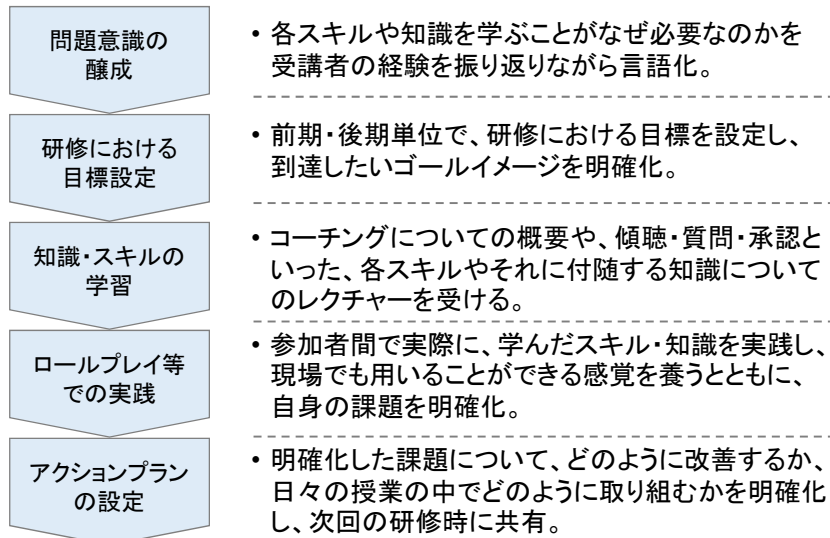
## (2) 教育スキルの習得：取り組み内容

■and seeds社からサポートを受け、下記の内容に取り組んだ。

前期	研修① 6月21日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ コーチングについての概要の理解</li><li>・ 自分のコミュニケーションタイプの確認</li><li>・ 自己成長目標についての設定</li></ul>
	研修② 7月5日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 問いかけの仕方についての方法論の学習</li><li>・ 自己成長目標について状況の確認</li></ul>
	振り返り 7月24日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 実践の振り返り</li><li>・ 目標に対するアセスメント</li></ul>
後期	研修③ 11月1日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 傾聴の仕方についての方法論の学習</li><li>・ 自己成長目標についての設定</li></ul>
	研修④ 12月14日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 承認の仕方についての方法論の学習</li><li>・ 自己成長目標についての状況の確認</li></ul>
	振り返り 1月22日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 実践の振り返り</li><li>・ 目標に対するアセスメント</li></ul>

## (2) 教育スキルの習得：取り組み内容

■ 各回のコーチング研修は、基本的には下記の様な流れで、スキルや知識の伝達だけでなく、実践を伴いながら、実施された。



## (2) 教育スキルの習得：成果

1. 自らのコミュニケーションタイプを理解したことで、学生と接する際の自分の傾向について参考にできる材料を得られた。
2. コーチングのスキル(質問、傾聴、承認)についての理解が進み、どのように学生に働きかければ、学生の学びや気づきを高め、主体的な行動を促せるかについての方法論を習得し、実践できた。

## (2) 教育スキルの習得：今後の展開

1. 今年度学んだ方法論について、さらなる実践に取り組み、それぞれの中で定着を目指す。
2. 方法論について、教員内で完結するのではなく、授業をサポートしてくれるFA(Facilitator & Advisor)やグループワーク時のリーダーについても、スキルの移転を目指していく。



教育開発推進機構長殿

研究代表者 藤本 頼生

## 平成 29 年度「FD 推進助成（乙）グループによる FD 推進事業」報告書

標記のことに、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	神道文化学部
事 業 名	神道教化関連授業の改善およびアクティブラーニング化にかかる教材開発事業
申請者氏名（所属／職名）	藤本頼生（神道文化学部神道文化学科／准教授）
<b>事 業 の 概 要</b>	
<p>以下、<u>本年度実施した推進事業の概要</u>について、年初の「グループによる FD 推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」「役割分担」を参照しつつ、具体的に記入してください。</p> <p>申請者の藤本頼生および共同研究者の黒崎浩行は、現在、神道教化概論Ⅰ・Ⅱ、神社ネットワーク論Ⅰ・Ⅱという神道教化に関わる科目を担当している。藤本・黒崎両名は、平成 23 年度より、隔年ではあるものの継続的に神道教化にかかる授業改善のための研究会を開催し、同じ神職養成を担う皇學館大学にて神道教化概論の科目を担当している板井正斉准教授（平成 24 年度に本学にて神社ネットワーク論Ⅰ・Ⅱを担当）を招き、互いの授業内容およびシラバスの点検などについて検討を重ね、授業改善に努めてきた経緯がある（平成 23 年度は、学部共同研究費「地域再生と神社に関する調査とカリキュラム・教材開発」、平成 24 年度は「神道祭祀思想・教化思想に関わる教材開発のための基礎研究」、平成 27 年度は、「神社・国学に関わる教材開発のための調査・研究」の費用にて開催）。</p> <p>そのため、平成 29 年度については、グループによる FD 推進事業を申請し、引き続き神道教化関連の学科目の授業改善のための教材開発および、近年各授業で求められているアクティブラーニングによる授業改善の可能性、とくに神道教化関連科目における現代社会における神社の位置や神社の公共性への開眼と、学生の実践的な目標意識や汎用的能力の向上とを有機的に結びつけることが可能か、アクティブラーニングの導入のための研究・検討を試みることを目的として、以下①～⑤の事業を企画し実施した（なお、③については以下に記す事由につき未実施）。</p> <p>①授業改善のためのカリキュラム・教材開発にかかる研究会の実施（1 回）…藤本担当</p> <p>神道教化科目担当の本学学部・別科の兼任講師にも案内をし、実施した。なお講師として、皇學館大学において同種の授業を担当している板井正斉准教授（同大学教育開発センター担当）および、アクティブラーニングにかかる宗教学の教科書を発刊し先進的な取り組みを行っている佛教大学の谷栄一准教授を招き、平成 29 年 9 月 14 日（木）～15 日（金）に「授業改善のためのカリキュラム・教材開発にかかる研究会」を実施。</p> <p>なお、研究会については、研究会については、個々の授業内容の説明および点検を中心に改善点を講師より指摘戴くとともに、教化関連授業であるため、その授業内容の摺り合わせを行うと共に、大谷・板井両講師から他大学にて実施されている宗教学、神道学関連のアクティブラーニングについても教授戴いた。なお、研究会については、『神社新報』（3371 号）平成 29 年 10 月 2 日付、5 面においてもその内容が取り上げられた。（後掲 図 3 新聞記事参照）</p> <p>②授業改善のための関連書籍・資料の購入…藤本担当</p> <p>アクティブラーニングにかかる以下の書籍の購入を行い、アクティブラーニング型授業の内容の参考とした。</p>	

『大学におけるアクティブラーニングの現在』(小田隆治編・ナカニシヤ出版)

『主体的な学びで学力を伸ばす!アクティブ・ラーニングの基本と授業のアイデア』(宮崎猛著・ナツメ社)

『クラスがまとまる!目的別かんたん学級あそび100』(横山洋子監修・ナツメ社)

『コミュニケーションと人間関係づくりのためのグループ体験学習ワーク』(鯖戸善弘著・金子書房)

『実践!アクティブラーニングができる本』(小林昭文監修・講談社)

『学習者中心の教育:アクティブラーニングを活かす大学授業』(メルリンワイマー著・頸草書房)

『15分でチームワークを高めるゲーム39』(ブライアン・コール・ミラー著・Discover21社)

『クラス全員がひとつになる 学級ゲーム&アクティビティ100』(甲斐崎博史著・ナツメ社)

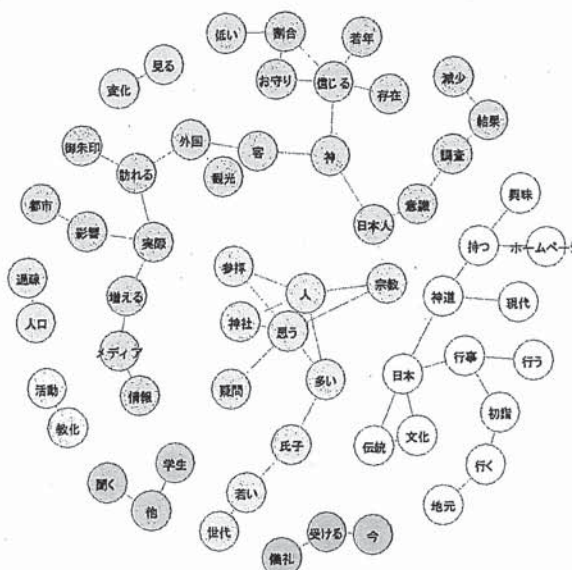
③授業改善のための実地調査(授業見学:皇學館大学「神道教化概論」「地域文化論」「現代神道論」ほか神道関連共通授業)…藤本・黒崎担当

③については、当初、皇學館大学において平成30年1月20日(土)の3限~5限にて実施される板井正斉氏担当の「神道教化概論(後期・隔週)」を授業見学し、その後、皇學館大学の授業担当者および、全学共通の神道科目の授業担当者と懇談する予定にて、先方と予定を組んでいたが、古事記学の国際シンポジウム(私立大学ブランディング事業の一環として実施)内にて行われる、「古事記アートコンテスト」の担当者であったため、表彰式等への関与をせねばならず、当該の授業見学のための出張を取り止めざるを得なかった。この点については非常に残念であり、何かの機会に事業化し、相互の授業改善交流も含めぜひ行いたいと考えている。

④課題解決型授業による成果の可視化・作品化(クラウド編集システムとオンデマンド出版)…黒崎担当

黒崎担当の宗教学演習Ⅰ・Ⅱについては、授業における到達目標「現代社会における諸問題と神社との関わりについて主体的な関心を持ち、自ら積極的に発言、議論できる」・「講義内容、テキスト、資料にもとづき、神社が結ぶ社会のつながりとその背景についての基礎知識を正確に説明できる」・「神社が結ぶ社会のつながりとその背景に関わる身近な事例に接して考察できる」にもとづき、第2・9・14回にグループワークを実施。第9回と第14回は、一週間前までに学生が小レポート(講義への質問・疑問/他の学生への質問/自分で調べたいこと、800字程度)を提出し、これをもとに関心の近い学生同士を教員がグループ化。今年度はこの過程にテキストマイニングソフト KH Coder(樋口耕一氏作のフリーソフトウェア、<http://khc.sourceforge.net>で配布)を導入し、クラスター分析により類似するレポートをグループ化した。同ソフトは共起ネットワーク(図1)のようなりポート内容の全体的な把握にも役立つことから、今後もグループワークの支援ツールとして活用していきたい。

(図1)

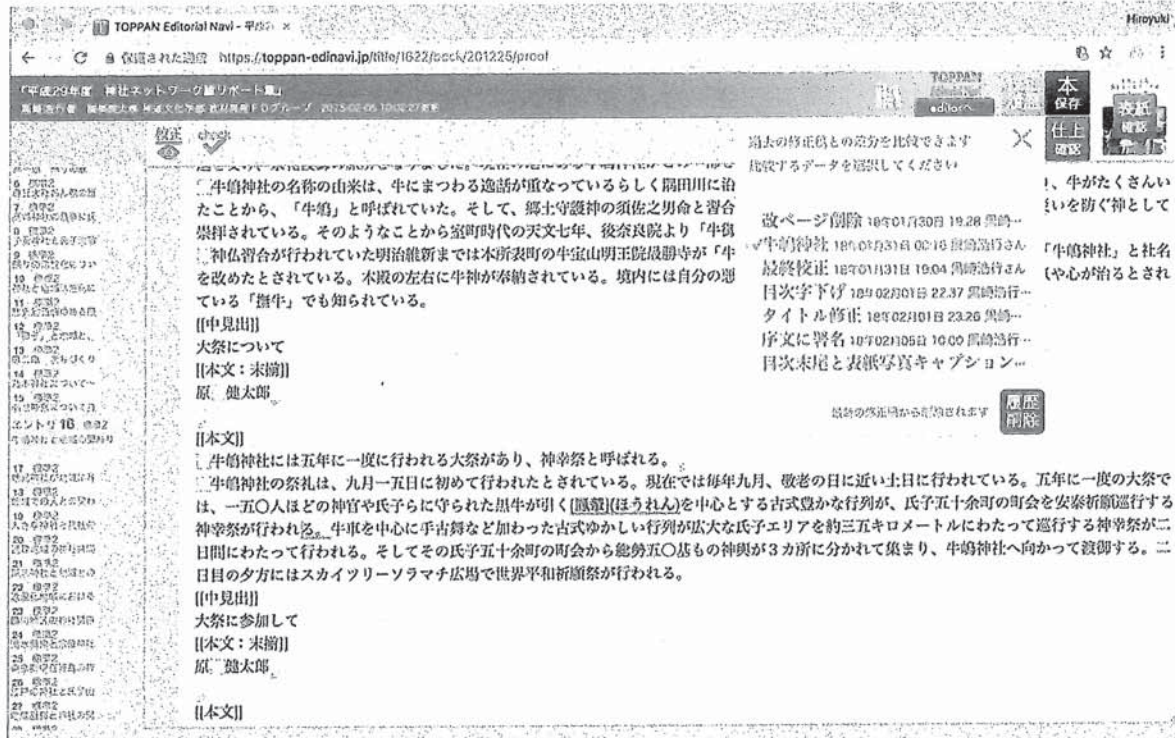


次に(神社ネットワーク論Ⅱ)については、授業における到達目標である「具体的な事例をふまえながら神社のネットワークづくりについて自分の考えを表明できる」・「神社のネットワークづくりについてのさまざまな取り組み事例に関心を持ち、積極的に疑問を發し議論できる」・「講義内容、テキスト、資料をもとに、神道が結ぶ社会のつながりについて正確に説明できる」にもとづき、9月末の授業開始時に、本年度は最終課題であるレポートを冊子にまとめて刊行することを予告した。10月中旬にレポートの要件と注意事項(特に剽窃の禁止とプライバシーの保護)を伝達した。10月中旬から1月上旬にかけて授業内でレポートの中間発表と質疑応答を行った。1月下旬にレポート



の提出（計 91 本）を受け、教員が原稿を確認し、冊子掲載の可否を判断し、採否の伝達（共同調査の成果は 1 本にまとめて 38 本を採用）と修正のやりとりをメール（KEAN アカウント使用）で行った。その上で 1 月末に教員が原稿を編集システムに入稿し、レイアウト、校正を行った（図 2）。

（図 2）



クリックするとこのタブを閉じます。これ以外のすべてのタブを閉じるには Option + クリックします

### 2.2.5 細田広さん

—(文字起こし：馬場)—

細田広さん：6 年間本当のいるところで復興が遅れているが、本当に遅れているのがこの農業分野であるとおもいます。こどもそうですが、南相馬は農業の町であるので携わる人がどんどん減っている。それは仕方のないことだと思います。しかし、農業は発展していかなくちゃならない。私が小学校中学校の時代だとやはり「農業が」厳しいと思っていました。面積も小さいので、実態もぬかぬかみみかみみかである、そういう親の土地があったが、その当時はコメの値段が相当なものであったんですね。50 五〇年前かな。行商人がほかの魚、野菜を持ってきた際にはお金ではなくお米がほしいとなっていたが、現在は、お米が残っている状況ですからなんとでもできませんが、こうした先輩方がやってきたことをなんとか残したい、発展させたいという気持ちで、圃場整備をやるうじやないかという考えでやってきた。反対もあつたり厳しいですが、また整備をやってよかったなとすんなりなることはなかったが、教授にも参加していただいている毎年 4 月の春祭り、豊作を願う祭りであります。私たちが今はできませんが神楽の奉納なんかもした時期がありました。神社と地域はつながりが深いものであったと思います。しかし、今年はかなり寒い期間が長かったため苦しい時の神頼みではないですがご加護を願っていくというのが山田神社のあるべき姿であると思っています。地域の心をつなぐ重要なものであると思います。豊作を祈願すること、また豊作になった時などは御礼をする、こういう地域が残っていることはなかなかない。厳しいところにはいますが、一人でなんとかする時代でもないのになんとか復興に向けてチーム—（【組合】）を組んでこれからやっていこうと準備中でありまして。幸いにして、政府から津波で流された農機具は貸し出しますよという制度があるのですが、—（【農機具を】）売ってしまう人がいるので 7 年間のリースという形で貸し出しています。そういった制度を利用していきまして農業は守られていくということではありますが、ここを農地にしてよかったなと思えるようにしていきたいと思っています。

版の履歴

名前付きの版のみを表示する

12月24日、13:30  
現在の版  
■ Hiroyuki Kurosaki

2017年11月

11月28日、16:35  
■ Hiroyuki Kurosaki

▶ 11月21日、10:42  
■ Hiroyuki Kurosaki

▼ 11月18日、19:27  
■ 馬場英次郎

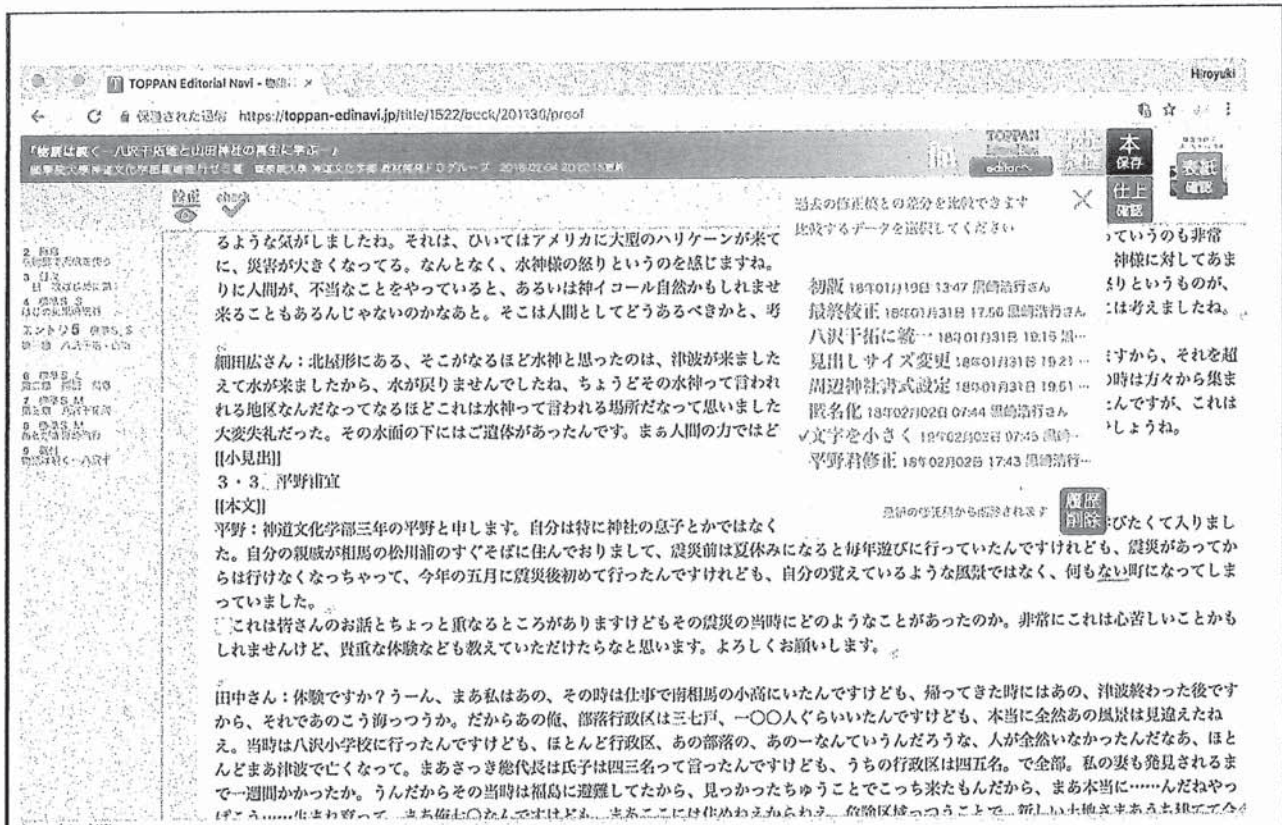
11月18日、19:27  
■ 馬場英次郎

11月18日、19:26  
■ 馬場英次郎

11月18日、19:26  
■ 馬場英次郎

11月18日、19:25  
■ 馬場英次郎

変更を表示



いずれの科目も、ある程度完成に近づいた原稿でなければ編集システムに載せることは混乱のもとになると考え、締め切り直前まで入稿のタイミングを引き延ばしたため、学生に編集システム利用のインストラクションを行う時間的余裕がなく、教員の作業負担がかなり重いものになってしまった。

従来教員のみが受け取るものとして取り組んできたリポートや調査報告を印刷物として刊行することで、自らの調査成果や記述・表現が調査協力者・関係者に与える影響を自覚することを学生に促した。これに十分に応えた学生もいたが、ほとんどが学部2年生である履修生にとっては過大な要求であったと思われる。今後もし冊子化の機会があるとしたら、段階的な指導を行うとともに、冊子は提出リポート全体の概要・傾向の紹介（その際「神社ネットワーク論Ⅰ」で行ったようにテキストマイニングの手法を活用する）と、すぐれたリポートの全文掲載との2部構成にしたほうがよいだろう。

⑤授業改善のためのアクティブラーニングを中心とした授業の実施（藤本・黒崎両者の担当授業にて実施）

黒崎担当授業については、毎回ではないものの、前述の通り、課題解決型授業による成果の可視化・作品化（クラウド編集システムとオンデマンド出版）にともなってグループワークを適宜導入実施。なお、授業については、申請者の藤本の授業について、武田秀章神道文化学部長が授業（神道教化概論Ⅰ・Ⅱ、神道学演習Ⅰ・Ⅱ）を直接見学を訪れ、その内容について、学部 Facebook(<https://www.facebook.com/kokugakuinshintou/>)に公開し（7月18日付、1月24日付）、一般に広く公開するとともに、読売新聞の依頼に基づき、中学生高校生向けに神道学演習Ⅰ・Ⅱで行った模擬授業を動画撮影して、読売新聞（yomiuri online）上の「講義の鉄人」欄に動画を公開した。

(<http://www.yomiuri.co.jp/stream/?id=06459>, <https://www.youtube.com/watch?v=kuDynGMuYtA>)

藤本の担当する神道教化概論Ⅰ・Ⅱについては、次のようにアクティブラーニングを実施した。

ガイダンスを除く、全授業回におけるワークシート形式の完全導入。ワークシートを通じて、学生にグループワーク、シンク・ペア・シェアを通じた学生の討議の充実。また神道教化の具体的方法論の前提となる演習を後期は導入。また、アクティブラーニング導入に伴う授業における講義部分の内容の精査（知識過多の改善）ワークシートについては、なるべく前回の授業のリフレクションおよび当該回の授業の振り返り、まとめをワークシート内で行えるよう

に配慮。

授業レジュメも内容を精査。本当に伝えたい内容をより具体的に考えて絞ることにしたが、まだまだレジュメにおける知識量が多すぎるといふ学生の感想も。

教科書の当該部分を必ず板書して明示。教科書のどのあたりに対応して進めているかを必ずアナウンスするようにしたが、あまり伝わらなかった印象をもった。

前期・後期ともに時間がなく、授業評価アンケートを授業中にアナウンスはしてやらせるようにしたが、アンケートの実施率が低かった。アンケートにて低評価であった予習復習のアナウンスがうまくできていないことを改善するよう心掛けたい。

#### ◎課題点◎

自身の担当授業（講義）は3年次に履修する授業ばかりのため、授業スタイルのメリハリ（神道教化概論、神社管理研究、宗教行政研究）をどうつけるかが課題。

ワークシートの回収、整理。150名のワークシートの返却ができない。欲しいという学生には対応しているが、できれば返却したい。

神道教化概論⇒講義（2/3から1/3）＋ワークシートもしくはグループワークであり、学生の座る場所が固定することから、ワーク時に同じ学生とばかり一緒になることもあり、違った人とやりたかったという不満も。150～130人でのグループづくりをどうおこなうかという点で、授業開始時にグループ分けを行うアイスブレイクの重要性を課題として感じた。

授業ではほぼ何度も教室を巡回し、学生に声をかけながらワークシートの書き込み状況の確認とアドバイス、対話を行うが、教員から話しかけられたくない学生もおり、そうした学生は教室の端に座ることも（一方で自身には声をかけられなかったという不満も）気を付けているつもりであるが、話しかける学生と話しかけられない学生がいると学生側に決めつけられてしまうこともあり、教員に学生の好き嫌いがあるのではないかとの意見もあった。

その一方で比較的少数ではあるが、従来型の講義形式を望む学生にとっては、この授業スタイルは苦痛でしかないのか？という不安。また、本当の意味で神道教化にかかる知識教授になっているのかという問題（実際には、テストの出来具合はあまり変わらない）。

また、教授する教員自身での不安（自身の学生時代における講義のスタイルが「善」と思う価値概念がどうしても抜けにくいことと、ファシリテーターとしての自身の技量不足を感じている点（うまく、グループ分けしてあげることや、グループに参加できていない学生への参加への促し、シートの出来具合を報告させるため、学生にマイクをうまく向けることにできないときもあって、気恥ずかしさから、どうしても抵抗感が抜けにくい）。

知識教授の面も大事であるので、講義内容を充実させたいという思いもあり、完全な反転授業をやりたいのが本音だが、実際は時間的な問題と本学部における学生の気質の問題もあるため、導入することにややためらいもあり、今回のFD事業では導入を行わなかった。

#### （神道学演習Ⅰ・Ⅱ）

ガイダンスおよび演習発表に伴う講義・発表テーマ決定に伴う相談、学生の演習発表（前期・後期とも実施）を行う回以外で、本年度は課題解決型授業として以下の内容を実施。なお、社頭講話演習については、隔年にて実施につき、本年度は実施せずレポートだけに留めた。なお、アクティブラーニングの実施に伴い、アイスブレイクの技法についてもいろいろ取り入れることができ、幼稚園や小学校で取り入れられている技法なども参考となり勉強となった。

1. 未来の神社の課題を考えるブレインストーミング（ぶっちゃけ寺 お坊さん便VTR）
2. 「祭り」とは何かについてについて考えるワーク（シンク・ペア・シェア）
3. 発話・表現・協働にかかるGW
4. 社頭講話の演習発表



適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【役割分担】年初計画で設定した役割分担は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【点検・評価・共有】点検・評価を行い、その結果をグループ全員で十分に共有・検討しましたか？

十分な点検・評価・共有ができた 一定の点検・評価・共有ができた

点検・評価・共有のどれかが不十分であった 点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

以下、本年度実施した推進事業の結果について、年初「グループによるFD推進事業」申請書の「目的」「内容」「計画」「役割分担」「点検・評価」及び上記でチェックした自己評価に照らして（特に【点検・評価・共有】については必ず言及）記入してください。

本年度実施した推進事業の結果について、目的・内容・計画・役割分担・点検・評価という点に照らし合わせて考えると、まず、①の「授業改善のためのカリキュラム・教材開発にかかる研究会の実施」については、前期が終わり後期授業に入る手前の9月中旬に実施でき、外部からの講師を招くとともに、同種類の授業を行う兼任講師などを招いて教員同士で、担当科目の授業内容の点検をすることができたことと、授業実施の上での種々の問題や課題などについて話し合うことができ、お互いにアドバイスし合うことができたことは、これまで神道教化関連の科目を持つ専任教員ではできていたが、兼任講師を含めて話し合うことができたという点で非常に評価できるものと思う。

次に、②の「授業改善のための関連書籍・資料の購入」という点については、授業改善のために必須であるアクティブラーニングとグループ分けなどで必要となるアイスブレイクの技法を学ぶためには、関連の書籍をまずは入手することが必要であり、関連書籍の購入にあたってはそれなりの費用がかかることもあって、大いに参考となった。

③の「授業改善のための実地調査（授業見学：皇學館大学「神道教化概論」「地域文化論」「現代神道論」ほか神道関連共通授業）」については、今回実施できなかったため、神道系の他大学にて行われている同種の授業を見学できなかったことは、残念であり、自身らの授業との比較、照らし合わせができず、その点では折角の機会を活かせなかったという点で、事業内容に掲げているながらも事業を推進できなかったという点で、悔いが残るものとなった。

④の「課題解決型授業による成果の可視化・作品化（クラウド編集システムとオンデマンド出版）」については、具体的な成果物ができあがり、手に取ってその作品を見ることができるともあり、演習レポートとして提出されるものはこれまで、教員だけ見ていたものを成果物として媒体として学生が共有することができるようになったことは、これまでになかった試みであり、評価できるものとする。しかしながら、教員の側にてある程度完成に近づいた原稿でなければ編集システムに載せることは混乱のもとになると考え、締め切り直前まで入稿のタイミングを引き延ばしたため、学生に編集システム利用のインストラクションを行う時間的余裕がなく、教員の作業負担がかなり重いのになってしまったことや、黒崎教授のみがこの試みを実施したため、事業担当者である藤本・黒崎両氏が互いで事業内容を共有し、適宜情報共有しながら点検することができなかったという点では反省すべき点であるものとする。

最後の⑤「授業改善のためのアクティブラーニングを中心とした授業の実施」については、藤本・黒崎両氏の担当授業にて実施したが、今回のFD事業に申請し、費用を頂戴してこれを執行するという行為そのものによって、実際の授業を改善していこうという教員そのものの意識の改革につながった点は、大きな成果であるものと考えている。実際に教員側にとっては、一旦作り上げた授業の内容を変えていくということは非常に手間のかかるものであり、教員自身腰がどうしても重くなりがちである。事業を実施することによって、アクティブラーニングに取り組んでいる教員同士（藤本・黒崎）にて、これまで以上に情報を共有しながらFDに取り組むことができたことが一番の成果であったと考えている。

また点検という観点からは、事業の代表担当者である藤本の担当授業において、武田秀章神道文化学部長による授業見学が行われ、前述した通り、神道文化学部 Facebook(<https://www.facebook.com/kokugakuinshinto/>)に公開し（7月18日付、1月24日付）、一般に広く公開するとともに、読売新聞の依頼に基づき、中学生高校生向けに神道学演習Ⅰ・

IIで行った模擬授業を動画撮影して、読売新聞 (yomiuri online) 上の「講義の鉄人」欄に動画を公開した。(http://www.yomiuri.co.jp/stream/?id=06459, https://www.youtube.com/watch?v=kuDynGMuYtA)、また、NHK(日本放送協会)が世界向けに放送しているNHKWorldの番組「Japanology Plus」の10月17日付け放送(日本ではNHKBS1にて10月24日に放送)に神職養成が取り上げられたこともあって、神道学演習I・IIの授業の撮影(撮影自体は10月3日)があり、アクティブラーニングに取り組む姿が取り上げられ、放映された。(https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/japanologyplus/program-20171017.html) こうした点からもアクティブラーニングにかかる授業内容が内外に取り上げられ、公開されることで、学外からも広く評価を受けることができたものと考えている。

## 今後の展望

【改善】本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

とても効果的である 効果的である あまり効果的でない 効果的でない (いずれかにチェック)

効果的である(ない)と判断した理由を、具体的に述べてください。

先に述べた通り、今回事業としてFDを推進したことによって、図3に示した新聞記事にも書かれている通り、学部での授業改善にかかる効果としては、学部長自らが、「科目の枠をこえた教員同士の交流が必要」とも述べているが、これまでも平成26年より副学部長、平成27年度からは学部長が神道文化学部の各教員の授業を訪問して、授業を積極的に大学HPやFacebookなどのメディアに発信していることによる、教員自身の授業への意識改革ということのみならず、授業を改善するべきだという意識を学部内の他の教員に示すことが少しでもできたことが効果があったといえるのではないかと考えている。どうしても本学部では、神職資格の付与にかかる科目を教授するという側面があるため、神社および神道にかかる知識の教授に偏りがちである。そうした点も含めて、アクティブラーニングの必要性を啓発してきたという点ではよかったものと考えている。今回できなかったが、同じ神道系大学である皇學館大学の神道系授業の見学ができていたなら、「神道と文化」などの共通テキストにかかる全学部必修授業などにも影響を及ぼすことができたものと考えられる。それゆえ、さらに学部内の教務委員を中心とする学部教員の意識が高まったものと考えられることもあり、その点では事業の実施ができなかった部分は悔やまれてならない。

【経費の執行】経費の執行は、当初の執行計画に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？

本年度の経費の執行状況について、執行計画に基づき、中間報告の前後に分けて記入してください。

経費の執行状況については、中間報告では、①の「授業改善のためのカリキュラム・教材開発にかかる研究会の実施」と、②の「授業改善のための関連書籍・資料の購入」のみしか実施できておらず、しかも①については、研究会の講師の交通費宿泊費として当初、京都一東京往復の交通費+宿泊費(1泊)と伊勢一東京の交通費+宿泊費(1泊)を予算として計上していたが実際には、講師が多忙にて、他の用務と抱き合わせにて上京することとなったため、講師の大谷栄一先生は旅費(交通費)が他の出張との兼ね合いにて往路の交通費のみの支出となり、宿泊費も支出しなかったこと、板井正斉先生についても、交通費・宿泊費の支出は同様の事由にて、他の出張に併せて上京することとなったことから、出張旅費を全く支出しなかったこともあり、未支出となった分についての減額補正を行うこととなった。

次に中間報告後についてであるが、前述の通り、未支出となった分についてのみ減額補正(65,830円分)を行ったが、③の「授業改善のための実地調査(授業見学：皇學館大学「神道教化概論」「地域文化論」「現代神道論」ほか神道関連共通授業)」について、実施できなかったこともあり、この部分の事業についての予算執行ができなかった。④の「課題解決型授業による成果の可視化・作品化(クラウド編集システムとオンデマンド出版)」については、ほぼ予定通りの予算執行できたことから、③の部分の予算となる79,440円が未執行となった。全体としては、補正後の全体予算額、532,230円に対して、おおよそ③の出張費分が残額(約80,000円程度)となった。ゆえに予算執行率としては、予算額を100%とすると、約85%を消化しており、その点では、概ね事業としては達成できたものと考えているが、執行時期という点に関していえば、③に関しての執行時期が適切でなく、執行時期を早めに設定していれば執行計画通りに予算執行ができていたと考えられる。

**【成果報告会】** 成果報告会の内容（説明事項、共有事項、問題提起等）について現時点での概要をお書きください。

成果報告会については、今回の報告書に記入した事項も含め、申請代表者のみならず、分担者も含めて発表資料を作成したこともあり、互いで事業内容についてやり取りするなかで種々授業改善にかかる問題を共有できたこともあり、その点でより良い発表ができたと考える。また、説明事項についても、事業の具体的内容として箇条書きで記した5点の内容について概要説明ができたものと考えている。会場からの質問を通じて、授業改善にかかるアドバイスを頂戴できた点も成果であった。

また、今回の事業を実施して見えてきた課題点をいかに改善できるかという点について、一つの問題提起ができたものと考えている。





## 平成29年度FD推進事業助成(甲・乙)成果報告会 報告資料

日時 平成30年2月21日(水) 16:00~18:00

場所 渋谷キャンパス 1号館4階 1403・1404 教室

### 神道文化学科グループFD

#### 「神道教化関連授業の改善およびアクティブラーニング化にかかる教材開発事業」報告

(研究代表者 藤本頼生)

はじめに

#### 1. 事業実施に至る経緯について

\*報告者がアクティブラーニング・FDを考えることになった直接の契機

A 中山郁先生からの依頼にて私大連のFD研修会へ参加(翌年も講師・発題者として出席)

B 同じ神道教化系科目を担当する黒崎浩行先生からのお声かけ

C 自身の担当教科の多さ、毎年のように新規で担当する教科目の多さ

(単に授業が多いということではない。同一の学年にて、神道教化・神社実務系科目が配当)

→平成24年度に板井正斉先生(皇學館大学教育開発センター准教授…皇學館大学にて神道教化概論の授業を担当)と藤本頼生がともに本学にて「神社ネットワーク論Ⅰ・Ⅱ」(黒崎浩行氏の国内派遣研究を受けて)の授業を担当。そのため、互いの授業内容およびシラバスの点検などについて検討を重ね、授業改善の研究会をはじめて開催。

①平成23年度=学部共同研究費「地域再生と神社に関する調査とカリキュラム・教材開発」

②平成24年度=学部共同研究費「神道祭祀思想・教化思想に関わる教材開発のための基礎研究」

③平成27年度=学部共同研究費「神社・国学に関わる教材開発のための調査・研究」

④平成29年度=教育開発推進機構グループFD事業助成

「神道教化関連授業の改善およびアクティブラーニング化にかかる教材開発事業」

⇒①~④ではいずれも授業内容に関する研究会を実施し、教材開発および教授内容についてのFD研究会を実施。③、④については、武田学部長にも参加していただき、FDについての学部としての意識の醸成を高めようと試みている。ゆえにおおよそ神道教化関連の学科目については、平成23年以降、FDにかかる研究会を2年に一度行ってきた経緯。

#### 2. 事業内容報告

事業内容にみる4つの方向性

藤本頼生…授業のアクティブラーニング化に向けての調査・研究、講師を招いての研究会の実施、上記を通じての神道教化概論Ⅰ・Ⅱの授業へのアクティブラーニングの導入、神道学演習Ⅰ・Ⅱにおけるアクティブラーニングの実施による課題解決型授業の展開。

黒崎浩行…神社ネットワーク論Ⅰ・Ⅱ授業のよりアクティブラーニング化、宗教学演習Ⅰ・Ⅱの授業のアクティブラーニング化、同授業における授業改善の成果物としてクラウドを用いてのオンデマンド出版を行うことでの課題解決型授業による成果の可視化・作品化

①授業改善のため、アクティブラーニングの完全導入

②成果物の刊行を通じた課題解決型授業による成果の可視化・作品化

③授業改善のための実地調査(授業見学:皇學館大学「神道教化概論」「地域文化論」「現代神道論」ほか神道関連共通授業)

④授業改善のためのカリキュラム・教材開発にかかる研究会の実施

### 3. 事業の振り返り

2-①については、藤本・黒崎ともにアクティブラーニングを各担当授業に導入。ついては、藤本担当、黒崎担当の授業の一部（ともに神道教化関連）にて以下の授業改善を実施。

#### (神道教化概論Ⅰ・Ⅱ)

ガイダンスを除く全授業回におけるワークシート形式の完全導入。ワークシートを通じて、学生にグループワーク、シンク・ペア・シェアを通じた学生の討議の充実。また神道教化の具体的方法論の前提となる演習を後期は導入。また、アクティブラーニング導入に伴う授業における講義部分の内容の精査（知識過多の改善）ワークシートについては、なるべく前回の授業のリフレクションおよび当該回の授業の振り返り、まとめをワークシート内で行えるように配慮。

授業レジュメも内容を精査。本当に伝えたい内容をより具体的に考えて絞ることにしたが、まだまだレジュメにおける知識量が多すぎるという学生の感想も。

教科書の当該部分を必ず板書して明示。教科書のどのあたりに対応して進めているかを必ずアナウンスするようにしたが、あまり伝わっていない。

前期・後期ともに時間がなく、授業評価アンケートを授業中にアナウンスはしてやらせるようにしたが、アンケートの実施率が低かった。アンケートにて低評価であった予習復習のアナウンスがうまくできていないことを改善するよう心掛けたい。

#### ◎課題点◎

自身の担当授業（講義）は3年次に履修する授業ばかりのため、授業スタイルのメリハリ（神道教化概論、神社管理研究、宗教行政研究）をどうつけるかが課題。

ワークシートの回収、整理。150名のワークシートの返却ができない。欲しいという学生には対応しているが、できれば返却したい。

神道教化概論⇒講義（2/3から1/3）＋ワークシートもしくはグループワーク

学生の座る場所が固定することから、ワーク時に同じ学生とばかり一緒になることもあり、違った人とやりたかったという不満も。150～130人でのグループづくりをどうおこなうか。アイスブレイクの重要性。

授業ではほぼ何度も教室内を巡回し、学生に声をかけながらワークシートの書き込み状況の確認とアドバイス、対話を行うが、教員から話しかけられたくない学生もおり、そうした学生は教室の端に座ることも（一方で自身には声をかけられなかったという不満も）

気を付けているつもりであるが、話しかける学生と話しかけられない学生がいると学生側に決めつけられてしまうこともあり、教員に学生の好き嫌いがあるのではないかとの意見も。

講義形式を望む学生にとっては、この授業スタイルは苦痛でしかないのか？という不安。

本当の意味で知識教授になっているのかという問題（実際には、テストの出来具合はあまり変わらないが）。

教授する自分自身での不安（自身の学生時代における講義のスタイルが「善」と思う価値概念がどうしても抜けない）

ファシリテーターとしての自身の技量不足

⇒うまく、グループ分けしてあげることや、グループに参加できていない学生への参加への促し、シートの出来具合を報告させるため、学生にマイクをうまく向けることにできないときもあって、気恥ずかしさから、どうしても抵抗感が抜けない。

知識教授の面も大事であるので、講義内容を充実させたいという思いもあり、完全な反転授業をやりたいのが本音だが、実際は時間的な問題と本学部における学生の気質の問題もあるため、導入することにややためらいも。

## (神道学演習Ⅰ・Ⅱ)

ガイダンスおよび演習発表に伴う講義・発表テーマ決定に伴う相談、学生の演習発表（前期・後期とも実施）を行う回以外で、本年度は課題解決型授業として以下の内容を実施。なお、社頭講話演習については、隔年にて実施につき、本年度は実施せずレポートだけに留めた。なお、アクティブラーニングの実施に伴い、アイスブレイクの技法についてもいろいろ取り入れることができ、幼稚園や小学校で取り入れられている技法なども参考となり勉強となった。

1. 未来の神社の課題を考えるブレインストーミング（ぶっちゃけ寺 お坊さん便VTR）
2. 「祭り」とは何かについてについて考えるワーク（シンク・ペア・シェア）
3. 発話・表現・協働にかかるGW
4. 社頭講話の演習発表
5. 未来の神社を考えるポスターセッション
6. 説得・仲裁にかかるGW（ピア・メディエーション）
7. 合意形成について学ぶGW（杜のまちや）
8. 危機管理について学ぶGW 神社クロスロード（2者択一の決断をせまるGW）
9. レポート作成にあたる論文検索の仕方についてのGW
10. 神社をめぐる考える神道教化（全5回中、本年は1回分）
11. ワールドカフェ（神道教化にかかる新聞記事の要約）

## ◎課題点◎

個人の演習発表との接続がうまくできない。課題解決型の授業は面白いと出席率が上がる一方で、個々の演習発表に入ると、出席率が下がる。グループワークを通じての3年生と4年生との交流をより深めたいが、なかなか難しい点。

2-②については、次のように実施した（この項黒崎執筆）。

## (宗教学演習Ⅰ・Ⅱ)

到達目標「現代社会における諸問題と神社との関わりについて主体的な関心を持ち、自ら積極的に発言、議論できる」・「講義内容、テキスト、資料にもとづき、神社が結ぶ社会のつながりとその背景についての基礎知識を正確に説明できる」・「神社が結ぶ社会のつながりとその背景に関わる身近な事例に接して考察できる」にもとづき、第2・9・14回にグループワークを実施。第9回と第14回は、一週間前までに学生が小レポート（講義への質問・疑問／他の学生への質問／自分で調べたいこと、800字程度）を提出し、これをもとに関心の近い学生同士を教員がグループ化。今年度はこの過程にテキストマイニングソフト KH Coder（樋口耕一氏作のフリーソフトウェア、<http://khc.sourceforge.net> で配布）を導入し、クラスター分析により類似するレポートをグループ化した。同ソフトは共起ネットワーク（図1）のようなレポート内容の全体的な把握にも役立つことから、今後もグループワークの支援ツールとして活用していきたい。

## (神社ネットワーク論Ⅱ)

到達目標「具体的な事例をふまえながら神社のネットワークづくりについて自分の考えを表明できる」・「神社のネットワークづくりについてのさまざまな取り組み事例に関心を持ち、積極的に疑問を發し議論できる」・「講義内容、テキスト、資料をもとに、神道が結ぶ社会のつながりについて正確に説明できる」にもとづき、9月末の授業開始時に、本年度は最終課題であるレポートを冊子にまとめて刊行することを予告した。10月中旬にレポートの要件と注意事項（特に剽窃の禁止とプライバシーの保護）を伝達した。10月中旬から1月上旬にかけて授業内でレポートの中間発表と質疑応答を行った。1月下旬にレポートの提出（計91本）を受け、教員が原稿を確認し、冊子掲載の可否を判断し、採否の伝達（共同調査の成果は1本にまとめて38本を採用）と修正のやりとりをメール（KEANアカウント使用）で行った。その上で1月末に教員が原稿を編集システムに入稿し、レイアウト、校正を行った（図4）。

いずれの科目も、ある程度完成に近づいた原稿でなければ編集システムに載せることは混乱のもとになると考え、締め切り直前まで入稿のタイミングを引き延ばしたため、学生に編集システム利用のインストラクションを行う時間的余裕がなく、教員の作業負担がかなり重いものになってしまった。

従来教員のみが受け取るものとして取り組んできたリポートや調査報告を印刷物として刊行することで、自らの調査成果や記述・表現が調査協力者・関係者に与える影響を自覚することを学生に促した。これに十分に応えた学生もいたが、ほとんどが学部2年生である履修生にとっては過大な要求であったと思われる。今後もし冊子化の機会があるとしたら、段階的な指導を行うとともに、冊子は提出リポート全体の概要・傾向の紹介（その際「神社ネットワーク論Ⅰ」で行ったようにテキストマイニングの手法を活用する）と、すぐれたリポートの全文掲載との2部構成にしたほうがよいだろう。

2-③については、当初、皇學館大学において平成30年1月20日（土）の3限～5限にて実施される板井正斉氏担当の「神道教化概論（後期・隔週）」を授業見学し、その後、皇學館大学の授業担当者および、全学共通の神道科目の授業担当者と懇談する予定にて、先方と予定を組んでいたが、古事記学の国際シンポジウム（私立大学ブランディング事業の一環として実施）内にて行われる、「古事記アートコンテスト」の担当者であったため、表彰式等への関与をせねばならず、当該の授業見学のための出張を取り止めざるを得なかった。（尚、黒崎氏についても、学生部長としての職務の関係上、出張できず）この点については非常に残念であり、何かの機会に事業化し、相互の授業改善交流も含めぜひ行いたいと考えている。

2-④については、平成29年9月14日（木）～15日（金）に「授業改善のためのカリキュラム・教材開発にかかる研究会」を実施。

講師に宗教学関連のアクティブラーニングについての教科書（『基礎ゼミ宗教学』【世界思想社】）を編纂され、取り組んでおられる佛教大学社会学部の大谷栄一教授と、社会福祉関連の援助技術法を用いて、課題解決型授業を神道教化科目にて展開されている皇學館大学教育開発センターの板井正斉准教授を講師としてお招きした。参加者は、本事業代表の藤本准教授と、共同研究者の黒崎浩行教授（担当科目「宗教学Ⅱ」で『基礎ゼミ宗教学』を教科書に採用してアクティブラーニングを実施）、本学にて神道教化概論Ⅰ・Ⅱを担当戴いている新井君美兼任講師（秩父神社権禰宜）、別科神道教化概説を担当戴いている小林威朗兼任講師（久伊豆神社禰宜）にも参加戴いた。研究会については、個々の授業内容の説明および点検を中心に改善点を講師より指摘戴くとともに、教化関連授業であるため、その授業内容の摺り合わせを行うと共に、大谷・板井両講師から他大学にて実施されている宗教学、神道学関連のアクティブラーニングについても教授戴いた。なお、研究会については、図5に掲げた『神社新報』（3371号）平成29年10月2日付、5面においてもその内容が取り上げられた。

(図1)

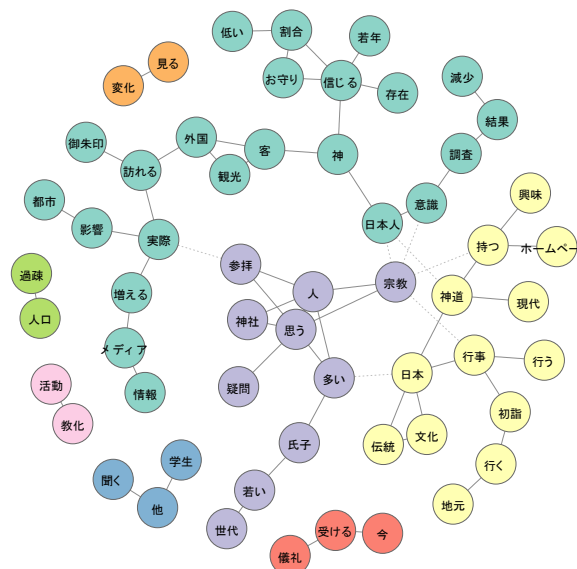


図 2



図 3

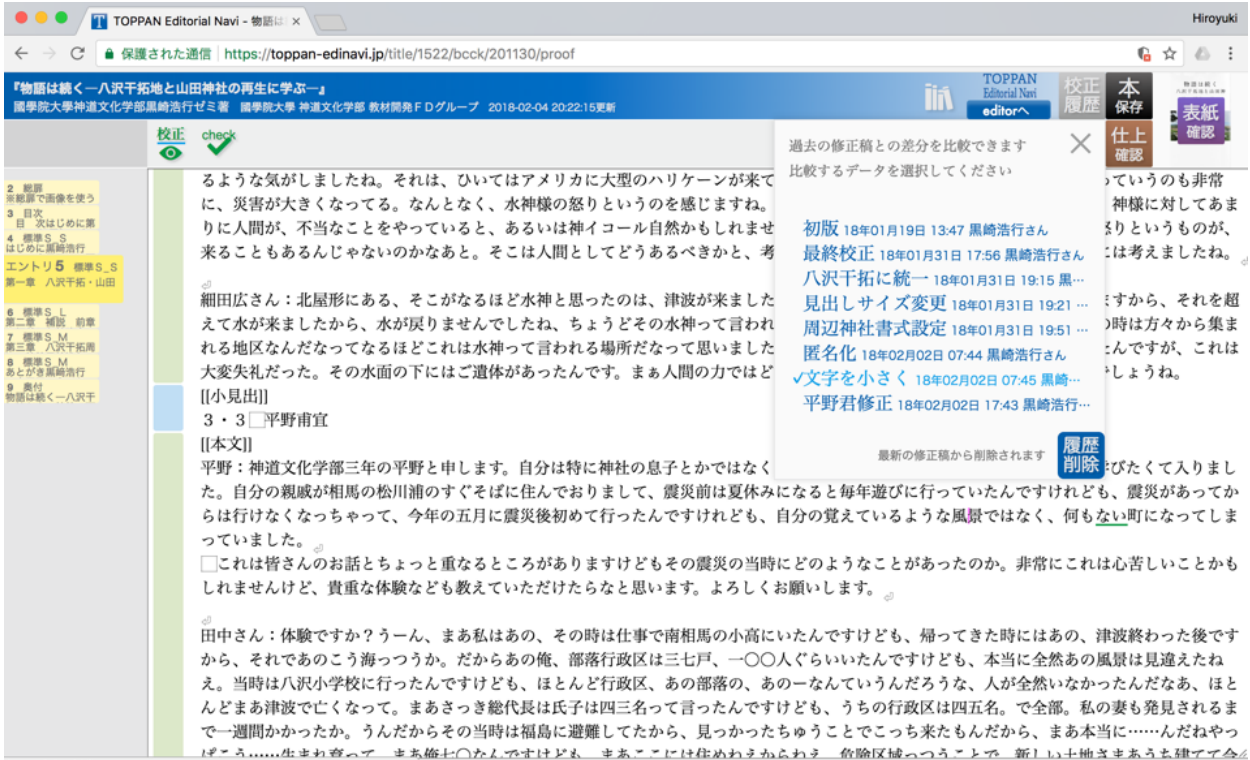


図4

TOPPAN Editorial Navi - 平成29年度  
保護された通信 https://toppan-edinavi.jp/title/1622/bcck/201225/proof

校正 check

過去の修正稿との差分を比較できます  
比較するデータを選択してください

改ページ削除 18年01月30日 19:28 黒崎...  
牛嶋神社 18年01月31日 00:16 黒崎浩行さん  
最終校正 18年01月31日 19:04 黒崎浩行さん  
目次字下げ 18年02月01日 22:37 黒崎浩行...  
タイトル修正 18年02月01日 23:26 黒崎...  
序文に署名 18年02月05日 10:00 黒崎浩行...  
目次末尾と表紙写真キャプション...

履歴削除

最新の修正稿から削除されます

牛嶋神社の名称の由来は、牛にまつわる逸話が重なっているらしく隔田川に沿ったことから、「牛嶋」と呼ばれていた。そして、郷土守護神の須佐之男命と習合崇拝されている。そのようなことから室町時代の天文七年、後奈良院より「牛嶋」神仏習合が行われていた明治維新までは本所表町の牛宝山明王院殿勝寺が「牛」を改めたとされている。本殿の左右に牛神が奉納されている。境内には自分の悪っている「撫牛」でも知られている。

[[中見出し]]  
大祭について  
[[本文：未揃]]  
原 健太郎

[[本文]]  
牛嶋神社には五年に一度に行われる大祭があり、神幸祭と呼ばれる。  
牛嶋神社の祭礼は、九月一日に初めて行われたとされている。現在では毎年九月、敬老の日に近い土日に行われている。五年に一度の大祭では、一五〇人ほどの神官や氏子らに守られた黒牛が引く「風籠(ほうれん)」を中心とする古式豊かな行列が、氏子五十余町の町会を安奉祈願巡行する神幸祭が行われる。牛車を中心に手古舞など加わった古式ゆかしい行列が広大な氏子エリアを約三五キロメートルにわたって巡行する神幸祭が二日間にわたって行われる。そしてその氏子五十余町の町会から総勢五〇基もの神輿が3カ所に分かれて集まり、牛嶋神社へ向かって渡御する。二日目の夕方にはスカイツリーソラマチ広場で世界平和祈願祭が行われる。

[[中見出し]]  
大祭に参加して  
[[本文：未揃]]  
原 健太郎

[[本文]]

図5

新 報 (第三種郵便物認可) 第3371号

## 國大と皇大の教員が 教化授業の改善検討

東京・渋谷区の國學院 大学の担当教員らが参加  
大學で九月十四・十五のした。  
この研究会は、國大が  
二日、神道教化に關連す  
る授業の改善に係る研究  
実地してゐる「神道教化  
會があり、國大と皇學館 関連授業の改善およびア  
カデミーフォーラム」の  
一環として実施。学修者  
の能動的な参加を取り入  
れた教授法「アクティブ  
・ラーニング」を含め、  
神道教化概論や神社ネッ  
トワーク論など教化関連  
の授業のあり方について  
意見を交換した。

初日は、このほどアク  
ティブ・ラーニングを取  
り入れた宗教学の教科書  
を編んだ佛敎大學教授の  
大谷栄一氏が、宗教学・  
宗教社会学における授業  
改善についての注意点を  
課題などを説明。次に皇  
大准教授の板井正吾氏  
が、神道教化概論の授業  
評価アンケートの変化や  
授業改善に向けた取組み  
を紹介した。

また國大教授の黒崎浩  
行氏は、神社ネットワー  
ク論における授業改善の  
事例と課題について報  
告。兼任講師として國大  
別科で神道教化概論の授  
業を担当してゐる小林威  
朗氏（埼玉・久伊豆神社  
禰宮）も授業を進める上  
での課題等を指摘し、各  
参加者からの意見を踏ま  
へて活潑な議論が交はさ  
れた。

翌十五日は、國大准教  
授の藤本頼生氏と國大兼  
任講師の新井君美氏（埼  
玉・秩父神社権禰宮）が、  
神道教化概論の授業改善  
の取組みを報告。神社ネ  
ットワーク論などについて  
書作成などについても話  
し合はれた。

最後に國大教授の武田  
秀章氏（神道文化学部長）  
が総括として、「さらなる  
授業改善のために、さら  
なる交流が肝要」と述べ、  
今回の研究会の意義や重  
要性を指摘した。

#### 4. 今後にむけて

- ・まだまだ、学部内でFDにかかる教員の意識改革・FDに対する認識の醸成が必要。神職課程にかかる知識教授型の授業が多いため、どうしても知識偏重の教育重視になりがちで、それにこだわる面も。
- ・基本的な問題として、神道教化にかかる授業は、神社本庁の神職階位（資格課程）授与にかかる必修の講義（正階：神道教化概説、明階：神道教化概論）であり、神社本庁の定める『神職教育指導要綱』（現行は平成21年版）および『神職研修・階位関係事務要綱』に定められている教育内容にはある程度沿う必要。とくに神道教化概論については、神社本庁から学科目の教科書も指定されている（庄本光政・澁川謙一著『改訂・神道教化概論』）。

神社ネットワーク論との教授内容のさらなる摺り合わせと開講年次の問題の再検討。

國學院大學は、神職養成機関としても高等機関なので、ある程度は資格課程にかかる指導内容を自由にできるとはいえ、神道教化概論については、資格課程にともなう科目となっており、その教科書が指定されている以上、どうしても半分くらいは教科書に従った知識教授を行う必要がある。

教科書…前半はとくに神道史および神道思想史（神道教化史）という歴史的な内容が中心。その意味では神道史にかかる知識の反復となる。

ただし、教科書が、昭和30年代に執筆したものを改訂し、それをさらに昭和60年代に増補改訂、執筆、以後部分的に何度か記述を改訂したものであるため、内容はかなり改定されてきているとはいえ、昭和60年代、あるいは平成10年代からしても、かなり社会の現状は変化して、時代にあっていないものも多い。その点で矛盾も。（以前教科書として使用していた神社本庁編の『神社の教化活動』も同様の事情）

（以下黒崎執筆）たとえ初歩的なものであってもインタビューやフィールドワーク、成果の刊行にはさまざまなリスクや倫理的な問題が伴う。こうした問題への教員側の対処法や学生への段階的な指導法についても今後議論を深めていく必要性を感じる。

以上





教育開発推進機構長殿

研究代表者 成田信子

## 平成 29 年度「FD 推進助成（乙）グループによる FD 推進事業」報告書

標記のことに関し、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	学部・学科横断型
事 業 名	学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発
申請者氏名（所属／職名）	成田信子（人間開発学部／教授）
<b>事 業 の 概 要</b>	
<p>1 事業の目的：共通教育における「基礎日本語」を中核にして、学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発を行う。共通教育の「基礎日本語」で培った力が、学部学科の学修を進める力になることをねらっている。</p> <p>2 事業内容</p> <p>事業1：「基礎日本語」を中心にした授業方法の開発、ルーブリック検討、教材開発          事業2：「基礎日本語」で育成する能力等についての学生の意識調査          事業3：カリキュラム改善と教科書改訂</p> <p>3 主な実施内容</p> <p>事業1：第1回～第7回のFD研究会（以下に示す）を行い、先進校事例を踏まえた授業方法の開発・研修を行った。</p> <p>第1回FD研究会「武蔵野大学の日本語リテラシーについて」          / 「グループワークの効果について」</p> <p>第2回FD研究会「誰の何のためのルーブリックか—大正大学の取り組みから—」          / 「前期「基礎日本語」の授業を振り返って」</p> <p>第3回FD研究会：「国語の汎用的能力をどうとらえるか—人間開発学部の取り組みから—」          / 「30年度「基礎日本語」シラバス素案について」</p> <p>第4回FD研究会「平成29年度初年次教育学会の報告—レポート・小論文作成授業の実践例—」          / 「30年度シラバス内容について」</p> <p>第5回FD研究会「大学・高等教育研究における文章表現研究のあゆみ          — 一般教育学会・大学教育学会の動向から—」          / 「「基礎日本語」第5回6回意見文作成の取り組みについて」</p> <p>第6回FD研究会「FD学生アンケート原案について」 / 「文章添削を通して考えたこと」</p> <p>第7回FD研究会「29年度後期の授業報告」 / 本年度のまとめ</p> <p>事業2：学生のアンケート調査の分析を行い、授業の成果は一定程度見られるものの課題があることが明らかになった。（報告書参照）</p>	

事業3：事業1のFD研究会を通して明らかになった改善点をカリキュラムに反映し、30年度使用教科書の原案を作成した。以下は目次である。

目次	シラバス対応回	
第1章	構成を考えて小論文を書こう	
	第1回	文章のどのような点が評価されるかを知ろう
		原稿用紙のルールを確認しよう
		双括型の文章とは何か確認しよう
	第2回	客観的な文章とはどのようなものか確認しよう
		グループを組んで意見を出し合おう
	第3回	小論文の構成を考えよう
	第4回	文章を推敲しよう
第2章	文章を読んで、自分の意見を書こう<読解型レポート>	
	第5回	文章の内容を要約しよう
	第6回	提示された問題について、自分の意見を書こう
	第7回	<読解型レポート>の読み合わせをしよう
第3章	テーマについて考え、自分の意見を書こう<調査型レポート>	
	第8回	テーマから問いを立てよう
	第9回	引用について学ぼう
	第10回	調査結果を踏まえて構成を考え、記述しよう
	第11回	<調査型レポート>の読み合わせをしよう
	コラム	敬語を使う「場」
第4章	教養としての日本語を学ぼう	
	第12回	敬語の使い方を学ぼう
	第13回	改まったメールの書き方を学ぼう
	第14回	手紙の書き方を学ぼう

## 事業の結果

【目的】年初計画で設定した目的は達成できましたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック）

十分達成できた（できる） 若干の計画修正の上達成可 大幅な修正の上達成可 達成できない

【内容】年初計画で設定した事業内容は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【計画】年初の計画は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【役割分担】年初計画で設定した役割分担は適切でしたか？（いずれかにチェック）

適切であった 概ね適切であった あまり適切でなかった 適切でなかった

【点検・評価・共有】点検・評価を行い、その結果をグループ全員で十分に共有・検討しましたか？

十分な点検・評価・共有ができた 一定の点検・評価・共有ができた

点検・評価・共有のどれかが不十分であった 点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

- ・目的「共通教育における「基礎日本語」を中核にして、学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発を行う。共通教育の「基礎日本語」で培った力が、学部学科の学修を進める力になることをねらっている。」については、FD研究会、学生アンケートを通して明らかにし共有できた部分が多い。今後、「基礎日本語」で培った力が学部学科の学修のどのような場面でどのように働いているのかを検証し、フィードフォワードしてさらにカリキュラムの改善を行いたい。
- ・事業内容はおおむね適切ではあったが、内容に掲げたルーブリックの研究については、先進校の事例研究にとどまり、「基礎日本語」の中での開発には至らなかった。30年度の課題としたい。
- ・事業計画のうち学生アンケート調査が後期になり、設計・分析とも改善の余地が残った。
- ・役割分担については、学部・学科横断型であったために、FDを推進する研究会主体にすすめていったため、必ずしも当初の役割分担通りには運ばなかった。
- ・点検・評価・共有については、教科書原案作成、FD成果報告会、FD報告書の作成に向けて、一定の共有はできたが、点検というところまでは時間が足らずに至らず、全体を見渡すのは研究代表者となった。グループ研究としてさらに見直しをもって進めることが必要であった。

## 今後の展望

**改善】** 本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

とても効果的である  効果的である  あまり効果的でない  効果的でない (いずれかにチェック)

授業方法の開発、ルーブリック検討、教材開発について以下の知見を得ることができた。

### ① グループワークの効果的運用

・現在の学生の実態として、グループワークで他の学生と意見を交わしにくい、反論が出にくいこと、グループワークと執筆のつながりが伝わりにくいことが指摘された。グループの構成人数は4人程度がよいこと、教師の役割としてコミュニケーションの喚起、ものの見方の例示等が挙げられた。

(参考値：アンケート数値)

・小論文の交流で使用する読み合わせシートの改善を行った。執筆者の論の道筋を追い、コメントを書くシートに、反論の観点がずれていないかを確認する項目を入れた。

30年度シラバスでは、記述する3本の文章すべてで論の道筋を追う交流を入れる。学生に交流シートをフィードバックし、他との交流によって得られるものを実感できる機会としたい。

### ② ルーブリックの検討・「基礎日本語」での使用可能性

・他大学のルーブリックの検証を経て、ルーブリックの機能の再検討の必要性が明らかになった。言語関連科目の場合は、少なくとも3種類のルーブリックがある。一般的な内容面・言語表現面を表したルーブリック、学生が自己点検に使うチェックシート、教員が添削のために使うルーブリックである。これに加えて、記述する文章に合わせたルーブリックが学修毎に作成される場合もある。

30年度は、一般的なルーブリックの改訂版を教科書冒頭に掲載し、文種に合わせたルーブリックの開発を行う。(課題の欄に詳述)

### ③ 教材開発

・29年度までのシラバスにおいては、思考判断に関わる側面、「問いをもつ」、「自分の意見をもつ」という面が弱かったため、後期の授業で「意見文」として2回分の授業で取り入れた。

各授業で実施後意見交換を行ったところ、文章の意見をなぞるような記述がみられ、意見をもつことのむずかしさが指摘された。30年度シラバスでは3回を充当して、「読解型レポート」として本格的に取り組む。

【経費の執行】経費の執行は、当初の執行計画に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？

【経費執行状況】

中間報告前

- ・当初機器備品費としてデータ入力用のコンピュータを申請したが、結果的に単価が下がり、用品費に変更し執行した。
- ・旅費交通費として、初年次教育学会出張を行い執行した。
- ・支払手数料として、データ入力作業を行い執行した。

中間報告後

- ・消耗品費として、データ整理のためのUSB等文具関係を購入執行した。
- ・旅費交通費として、1月先進校視察と2月研究会発表を行い執行した。
- ・図書資料費として、文章診断ソフトならびに文献資料を購入執行した。
- ・印刷製本費として、報告書作成を行い、執行予定である。
- ・通信運搬費として、報告書郵送を予定し、執行予定である。

執行率は概ね適切であったが、全体的に計画よりも執行時期が遅くなった。

【成果報告会】成果報告会の内容（説明事項、共有事項、問題提起等）について現時点での概要をお書きください。

成果報告会では、次の点から報告を行った。

- 1 事業の目的
- 2 事業の内容
- 3 事業推進の経過
- 4 成果
- 5 課題

質疑応答では、本発表が共通教育としての取り組みであることから、学部の授業との連携の意義の発言があり、今後推進の課題をいただいた。また、アンケートの数値の見方や要因についても指摘をいただき、今後精査したい。

他の報告に接し、FDの取り組みを発信、共有していく意義を感じた。

以上

別添で報告書を提出します。

## 学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発

研究代表者： 成田信子（人間開発学部）

研究分担者： 藤田大誠（人間開発学部）／吉永安里（人間開発学部）／渡邊雅俊（人間開発学部）

吉田永弘（文学部）／大津直子（教育開発推進機構）／鈴木道代（教育開発推進機構）

研究協力者： 戸村理（教育開発推進機構）／「基礎日本語」科目担当兼任講師

**1 事業の目的：**共通教育における「基礎日本語」を中核にして、学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発を行う。共通教育の「基礎日本語」で培った力が、学部学科の学修を進める力になることをねらっている。

## 2 事業内容

事業 1：「基礎日本語」を中心にした授業方法の開発、ルーブリック検討、教材開発

事業 2：「基礎日本語」で育成する能力等についての学生の意識調査

事業 3：カリキュラム改善と教科書改訂

## 3 事業推進の経過

・第 1 回～第 7 回の F D 研究会を行った。（3 月に報告書上梓）

・初年次教育ならびに言語関連科目の先進的な取り組みについて調査を行った。

・ F D 研究会の報告と各調査をふまえて、シラバスの改訂を行い、30 年度使用教科書の原案を策定した。

## 4 成果

事業 1：「基礎日本語」を中心にした授業方法の開発、ルーブリック検討、教材開発

### ①グループワークの効果的運用

・現在の学生の実態として、グループワークで他の学生と意見を交わしにくい、反論が出にくいこと、グループワークと執筆のつながりが伝わりにくいことが指摘された。グループの構成人数は 4 人程度がよいこと、教師の役割としてコミュニケーションの喚起、ものの見方の例示等が挙げられた。

参考値：アンケート数値

「人の意見を参考にして自分の意見をもつ」期待低 変化低

期待有（授業 A から順に）期待有の度数/全体の度数 38/333

4/30 6/17 2/27 7/86 7/95 3/19 1/14 5/22 3/23

期待無変化有(抽出) A 8/30 C 7/27

・小論文の交流で使用する読み合わせシートの改善を行った。執筆者の論の道筋を追い、コメントを書くシートに、反論の観点がずれていないかを確認する項目を入れた。

30年度シラバスでは、記述する3本の文章すべてで論の道筋を追う交流を入れる。学生に交流シートをフィードバックし、他との交流によって得られるものを実感できる機会としたい。

### ② ルーブリックの検討・「基礎日本語」での使用可能性

・他大学のルーブリックの検証を経て、ルーブリックの機能の再検討の必要性が明らかになった。言語関連科目の場合は、少なくとも3種類のルーブリックがある。一般的な内容面・言語表現面を表したルーブリック、学生が自己点検に使うチェックシート、教員が添削のために使うルーブリックである。これに加えて、記述する文章に合わせたルーブリックが学修毎に作成される場合もある。

30年度は、一般的なルーブリックの改訂版を教科書冒頭に掲載し、文種に合わせたルーブリックの開発を行う。(課題の欄に詳述)

### ③ 教材開発

・29年度までのシラバスにおいては、思考判断に関わる側面、「問いをもつ」、「自分の意見をもつ」という面が弱かったため、後期の授業で「意見文」として2回分の授業で取り入れた。以下の通りである。

1 目標提示/ 新聞記事(社説)を読んで要点をつかみ、要旨をまとめる。

要旨に対して自分の意見をもち、文章に書く。

2 A社の新聞記事読解・内容要約

3 同テーマのB社の社説を読んで、考えたことを4人程度のグループで交流する。

4 文章が提起する問題について400字程度の意見文を書く。

取り上げたトピック「コンビニエンスストアの値下げ販売に関する公正取引委員会の判断

各授業で実施後意見交換を行ったところ、A社B社の意見をなぞるような記述がみられ、意見をもつことのむずかしさが指摘された。30年度シラバスでは3回を充当して、「読解型レポート」として本格的に取り組む。

## 事業2:「基礎日本語」で育成する能力等についての学生の意識調査

後期の授業で、アンケート調査を行った。アンケートの調査項目はシラバス・授業内容に照らして、FD研究会の検討を経て策定した。

アンケートタイトル:「基礎日本語」の学修内容とその習熟度に関する調査

アンケート実施:29年度後期12月

回答数:333名 (全履修者525名)

アンケート内容

項番1 どのようなことを期待して「基礎日本語」を履修しましたか。あてはまる項目を選択してください。(選択式 複数回答)

- ・論理的に文章を書く
- ・文章の構成を意識して文章を書く
- ・根拠に基づいて意見を述べる

- ・文献の引用の仕方がわかる
- ・文章を要約して理解する
- ・人の意見を参考にして自分の意見をもつ
- ・自ら問いをたてて文章を書く
- ・書いた文章を推敲する
- ・正しい表現を用いて文章を書く
- ・語彙・語句の知識（漢字を含む）を増やす
- ・文章を書くことへの抵抗感をなくす

項番2 受講前に、項番1の選択肢にはない力を期待していた場合は具体的に書いてください。(入力式 1行)

項番3 「基礎日本語」を受講して何か変化したことはありますか。あてはまる項目を選択してください。(選択式 複数回答) 項番1と同じ内容

項番4 受講後に、項番3の選択肢にない変化があったと思う場合は具体的に書いてください。(入力式 1行)

項番5 基礎日本語の授業で学んだことがほかの学修に役立つと思う点があれば述べてください。(入力式 1行)

#### アンケート結果についての考察

##### ①項番1・3についての考察(資料)

・期待の有無にかかわらず、変化があったと答えた学生は3割から4割程度である。学修に一定の成果は見られる。

参考値：期待有・変化有+期待無・変化有(授業Aから順に)

37%43% 30%34%30%33%35%34%44%

・個々の授業の全体値、個々の項目の値について、授業方法与照らし合わせた検証が必要である。

・期待無/変化無と答えた学生が4割から6割にのぼっていることについて、アンケートの設計から検討が必要である。すなわち、教師が予想する期待項目と学生が科目に求めている項目にずれがあることが考えられる。自由記述の取り入れ方も含めて検討の余地がある。

##### ②学生がとらえる汎用的能力についての考察(資料)

項番5 「基礎日本語の授業で学んだことがほかの学修に役立つと思う点があれば述べてください。」の回答について、カテゴリー分けによる記述分析を行った。

以下の5カテゴリーとした。

文章作成への抵抗感の低減

文章作成スキル：他の科目での文章作成に役立つと答えているもの

文章表現技術：文章の書き方、またはその下位項目と考えられるもの(論理、構成、引用等)

基礎的な漢字・語彙力：

その他：社会生活、コミュニケーション等

全体として文章表現技術が一番多く挙げられた。下位項目（薄ピンク）はいずれも授業の重点にしていることであり、学生がそれを役立つととらえていることは成果である。

- ・各授業で学生が挙げている項目について担当教員が自分の教授と照らして振り返ることが重要である。（FD予定）
- ・文章作成スキルで挙げられた他科目については、担当学部教員と共有して授業開発を行いたい。

### 事業3：カリキュラム改善と教科書改訂

FD研究会と29年度の授業実施・振り返りを経て、30年度使用教科書の原案を策定した。2章と3章に課題になっている思考力、判断力にかかわるレポート作成を入れた。

- ・教科書原案目次（ただし15回はまとめなので教科書にはない）

目次	シラバスの回	
第1章	構成を考えて小論文を書こう	
	第1回	文章のどのような点が評価されるかを知ろう
		原稿用紙のルールを確認しよう
		双括型の文章とは何か確認しよう
	第2回	客観的な文章とはどのようなものか確認しよう
		グループを組んで意見を出し合おう
	第3回	小論文の構成を考えよう
	第4回	文章を推敲しよう
第2章	文章を読んで、自分の意見を書こう<読解型レポート>	
	第5回	文章の内容を要約しよう
	第6回	提示された問題について、自分の意見を書こう
	第7回	<読解型レポート>の読み合わせをしよう
第3章	テーマについて考え、自分の意見を書こう<調査型レポート>	
	第8回	テーマから問いを立てよう
	第9回	引用について学ぼう
	第10回	調査結果を踏まえて構成を考え、記述しよう
	第11回	<調査型レポート>の読み合わせをしよう
	コラム	敬語を使う「場」
第4章	教養としての日本語を学ぼう	
	第12回	敬語の使い方を学ぼう
	第13回	改まったメールの書き方を学ぼう
	第14回	手紙の書き方を学ぼう
	第15回	まとめ 返却・フィードバック



## 5 課題

- ・学生のニーズにあった授業と、教員が必要と考える授業について、言語関連科目の性格に照らして考える必要がある。
- ・「基礎日本語」の内容に即したルーブリックの開発を進める必要がある。すでに述べたように、ルーブリックには機能があり、「基礎日本語」に適したルーブリックを開発する。30年度シラバスにおいては3種類の文章作成を考えており、文種に合わせたルーブリックを開発したい。他の分野の知見を得ながら、学生の自己学修能力につなげて考える必要がある。
- ・アンケートで得られた情報をさらに分析し、個々の担当教員にフィードバックするとともに、全体の科目設計に生かす視点をもつ。次の授業運営に生かすためにはさらなる議論が必要である。
- ・科目担当者とFD研究分担者・研究協力者の役割を明確にし、効果的な運営を進め、各自が収穫を得られるようにしたい。FD研究会のもちかたにも工夫が必要である。



## アンケート結果：項番1と項番3の分析結果

授業A					
項目毎の受講者の「受講前の期待（有・無）」と「受講後の変化（有・無）」パターンの度数と割合（％）					
項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	10	10	3	7	30
文章の構成を意識して文章を書く	7	4	8	11	30
根拠に基づいて意見を述べる	4	2	6	18	30
文献の引用の仕方がわかる	2	3	7	18	30
文章を要約して理解する	8	3	7	12	30
人の意見を参考にして自分の意見をもつ	1	3	8	18	30
自ら問いをたてて文章を書く	4	4	6	16	30
書いた文章を推敲する	4	1	5	20	30
正しい表現を用いて文章を書く	6	9	2	13	30
語彙・語句の知識（漢字を含む）を増やす	10	3	7	10	30
文章を書くことへの抵抗感をなくす	8	7	2	13	30
度数	64	49	61	156	330
割合	19%	15%	18%	47%	100%

授業B					
項目毎の受講者の「受講前の期待（有・無）」と「受講後の変化（有・無）」パターンの度数と割合（％）					
項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	9	4	1	3	17
文章の構成を意識して文章を書く	6	4	3	4	17
根拠に基づいて意見を述べる	5	4	1	7	17
文献の引用の仕方がわかる	7	2	5	3	17
文章を要約して理解する	3	5	4	5	17
人の意見を参考にして自分の意見をもつ	3	3	2	9	17
自ら問いをたてて文章を書く	1	1	0	15	17
書いた文章を推敲する	5	2	1	9	17
正しい表現を用いて文章を書く	6	1	1	9	17
語彙・語句の知識（漢字を含む）を増やす	8	0	3	6	17
文章を書くことへの抵抗感をなくす	5	1	1	10	17
度数	58	27	22	80	187
割合	31%	14%	12%	43%	100%

授業C

項目毎の受講者の「受講前の期待（有・無）」と「受講後の変化（有・無）」パターンの度数と割合（％）

項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	9	7	4	7	27
文章の構成を意識して文章を書	10	1	4	12	27
根拠に基づいて意見を述べる	4	3	3	17	27
文献の引用の仕方がわかる	4	0	7	16	27
文章を要約して理解する	2	3	2	20	27
人の意見を参考にして自分の意	0	2	7	18	27
自ら問いをたてて文章を書く	2	2	0	23	27
書いた文章を推敲する	4	2	4	17	27
正しい表現を用いて文章を書く	9	6	1	11	27
語彙・語句の知識（漢字を含む	6	3	3	15	27
文章を書くことへの抵抗感をな	2	5	1	19	27
度数	52	34	36	175	297
割合	18%	11%	12%	59%	100%

授業D~G（同一授業者）

項目毎の受講者の「受講前の期待（有・無）」と「受講後の変化（有・無）」パターンの度数と割合（％）

項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	33	21	12	20	86
文章の構成を意識して文章を書く	30	12	24	20	86
根拠に基づいて意見を述べる	3	7	29	47	86
文献の引用の仕方がわかる	5	4	22	55	86
文章を要約して理解する	3	7	17	59	86
人の意見を参考にして自分の意見をもつ	2	5	14	65	86
自ら問いをたてて文章を書く	2	5	3	76	86
書いた文章を推敲する	3	5	18	60	86
正しい表現を用いて文章を書く	21	19	8	38	86
語彙・語句の知識（漢字を含む）を増やす	26	8	24	28	86
文章を書くことへの抵抗感をなくす	10	14	11	51	86
度数	138	107	182	519	946
割合	15%	11%	19%	55%	100%

授業H~K (同一授業者)					
項目毎の受講者の「受講前の期待(有・無)」と「受講後の変化(有・無)」パターンの度数と割合(%)					
項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	40	21	5	29	95
文章の構成を意識して文章を書く	28	15	24	28	95
根拠に基づいて意見を述べる	14	6	22	53	95
文献の引用の仕方がわかる	18	3	23	51	95
文章を要約して理解する	9	8	3	75	95
人の意見を参考にして自分の意見をもつ	3	4	15	73	95
自ら問いをたてて文章を書く	3	5	3	84	95
書いた文章を推敲する	6	5	6	78	95
正しい表現を用いて文章を書く	28	21	8	38	95
語彙・語句の知識(漢字を含む)を増やす	32	7	13	43	95
文章を書くことへの抵抗感をなくす	11	15	5	64	95
度数	192	110	127	616	1045
割合	18%	11%	12%	59%	100%

授業L					
項目毎の受講者の「受講前の期待(有・無)」と「受講後の変化(有・無)」パターンの度数と割合(%)					
項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	11	4	0	4	19
文章の構成を意識して文章を書く	9	4	1	5	19
根拠に基づいて意見を述べる	2	4	3	10	19
文献の引用の仕方がわかる	4	0	1	14	19
文章を要約して理解する	4	3	3	9	19
人の意見を参考にして自分の意見をもつ	3	0	2	14	19
自ら問いをたてて文章を書く	2	1	1	15	19
書いた文章を推敲する	1	0	1	17	19
正しい表現を用いて文章を書く	3	2	5	9	19
語彙・語句の知識(漢字を含む)を増やす	6	1	3	9	19
文章を書くことへの抵抗感をなくす	0	0	3	16	19
度数	45	19	23	122	209
割合	22%	9%	11%	58%	100%

授業M～N (同一授業者)					
項目毎の受講者の「受講前の期待(有・無)」と「受講後の変化(有・無)」パターンの度数と割合(%)					
項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	10	1	0	3	14
文章の構成を意識して文章を書く	1	2	4	7	14
根拠に基づいて意見を述べる	2	2	1	9	14
文献の引用の仕方がわかる	4	1	4	5	14
文章を要約して理解する	2	1	1	10	14
人の意見を参考にして自分の意見をもつ	0	1	1	12	14
自ら問いをたてて文章を書く	1	1	0	12	14
書いた文章を推敲する	2	0	1	11	14
正しい表現を用いて文章を書く	4	2	2	6	14
語彙・語句の知識(漢字を含む)を増やす	7	2	3	2	14
文章を書くことへの抵抗感をなくす	2	1	1	10	14
度数	35	14	18	87	154
割合	23%	9%	12%	56%	100%

授業O					
項目毎の受講者の「受講前の期待(有・無)」と「受講後の変化(有・無)」パターンの度数と割合(%)					
項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	8	5	3	6	22
文章の構成を意識して文章を書く	8	3	3	8	22
根拠に基づいて意見を述べる	1	1	8	12	22
文献の引用の仕方がわかる	3	1	4	14	22
文章を要約して理解する	2	4	4	12	22
人の意見を参考にして自分の意見をもつ	3	2	1	16	22
自ら問いをたてて文章を書く	0	0	3	19	22
書いた文章を推敲する	1	0	2	19	22
正しい表現を用いて文章を書く	5	4	2	11	22
語彙・語句の知識(漢字を含む)を増やす	10	1	5	6	22
文章を書くことへの抵抗感をなくす	2	2	4	14	22
度数	43	23	39	137	242
割合	18%	10%	16%	57%	100%

授業P					
項目毎の受講者の「受講前の期待（有・無）」と「受講後の変化（有・無）」パターンの度数と割合（％）					
項目/期待と変化有無パターン	期待有・ 変化有	期待有・ 変化無	期待無・ 変化有	期待無・ 変化無	総計
論理的に文章を書く	11	5	3	4	23
文章の構成を意識して文章を書く	11	1	2	9	23
根拠に基づいて意見を述べる	5	1	6	11	23
文献の引用の仕方がわかる	8	1	5	9	23
文章を要約して理解する	5	4	0	14	23
人の意見を参考にして自分の意見をもつ	4	6	2	11	23
自ら問いをたてて文章を書く	3	0	3	17	23
書いた文章を推敲する	5	1	2	15	23
正しい表現を用いて文章を書く	12	1	3	7	23
語彙・語句の知識（漢字を含む）を増やす	7	1	5	10	23
文章を書くことへの抵抗感をなくす	6	1	4	12	23
度数	77	22	35	119	253
割合	30%	9%	14%	47%	100%





アンケート結果: 項番5の記述分析				
項番5: 「基礎日本語の授業で学んだことがほかの学修に役立つと思う点があれば述べてください。」				
カテゴリー/授業	授業A	授業B	授業C	授業D
文章作成への抵抗感の低減	長い文章を書くことへの抵抗が減りました 抵抗が軽くなったので、これからももっと文章を書いていきたい			
文章作成スキル	卒論とか、文章書くものには役立ちます。 これからはレポートや、論述など文を書くという場面が多くなるのでその際の力には確実になると思った 卒業論文に役立つと思っています。  今後レポートなどにやくだつ 今後の論文作成に役立つ レポート卒論を書くのに役立つ  卒業論文  レポートを書くことに役立つ  他の様々な学修のレポートなど レポート 卒論  これからのレポートや論文に役立つ	教職の小論文	他教科のレポート作成  レポート作成時に役に立ちました  レポートの作成  各科目のレポート作成  今後の他授業のレポートなど 他の授業でレポートを書く時にかなりうまくまとめられるようになった。 論文やレポートを書くときに役立つと思った。 他の授業で必要とされる文章についての基礎的な内容を学べたと思います。	ほかの授業の論文のときなどに役立つと思いました。 卒論や長い文章を書く際に役立つと思う。 レポートなど文章を書くことが苦手な人にとっても役立つと感じた レポートや論文を書くときの参考になると感じました。 論理学
文章表現技術	文章の書き方の改善  レポートや文章の書き方を一から学ぶことができました。  レポートの製作にとっても役立つ技術を学んだ。 文章力が以前よりついたので、これからのいろいろな場面で応用していける。  根拠に基づいて文章を書く力  文章の構成を考えること  文章の構成の仕方などを学ぶことができるので、レポートや論文を書くときに役に立つと思います。  文章の構成の力が受講前よりもついていたと思います 引用のしかたがわかって良かった！ 引用の仕方は論文やレポートを書く時にとても役立つようになりました。	レポートの書き方  文章の構成  引用の仕方	レポートの書き方  他の講座のレポート課題や論述をする際に学んだ書き方を参考にして書くことができる 数百字のレポートを書くスピードがあげられました  文の要点の把握  他の授業でも「文章を論理的に書く力」を求められる場面が多いため、この授業を受けることができてよかったです。  文章の論点のズレなどに気がつく点  文章の構成を組み立てから、書くようになった  引用の仕方。	文章をうまく書けるようになった点。  正しい文章が書けるようになった  メールの書き方がいい勉強になりました。  レポートや手紙・メールの書き方が他のにも役立ってそうです。  目上の人へのメールの送り方が、非常に役立つと思います。  法学のレポートを書くときや大学の先生にメールを送るときに丁寧な言葉、綺麗な文章を作ることによって役に立つと思いました。  論理的に文章を書くことが出来れば、レポートや社会に出た時に役立つので学べて良かったです。  レポートを書くときに文章の構成を作れる
基礎的な漢字・語彙力	新しく知った言葉など 漢字もしっかり学習できたので漢検も挑戦して見たいと思いました。 基礎漢字能力の力量によって文章の説得性に関わってくること。 漢字検定を受けようとおもいました！	日本語の上達 日本人として最低限の言葉の使い方	レポート提出の際の言葉の選択に自信がつく点 敬語の使い方 漢字テストによって語彙が増えた事によってレポートを書く際に役に立つと思います 一般常識であることわざ、漢字の力がついた	敬語の分野は社会に出てからも役に立つと思った。有り難かったです。
その他		教授が最後の授業で申し上げた、多角的な視点を身に付けようと思っ	自分の意見を話す時にしっかり想定される反論を考えるようになった。  グループでの発表	就活 先生との会話や先輩との会話で敬語が前よりもスラスラ使えるようになった

アンケート結果: 項番5の記述分析

No. 2				
項番5:「基礎日本語の授業で学んだことがほかの学修に役立つと思う点があれば述べてください。」	授業E	授業F	授業G	授業H
<p>文章作成への抵抗感の低減</p>				
<p>文章作成スキル</p>	<p>これからのゼミの論文などで役に立つと思う</p> <p>これからのレポート等に役立つのではと思います。</p> <p>論文作成やほかの授業のレポートに役立つと思う。また社会人になってから大変役立つことだと思う</p> <p>他の学修もそうですが、日常生活で全て使えると思います！</p> <p>ほかの授業でのレポート</p> <p>他の授業のレポートを書くとき</p>	<p>レポートや卒論を書く時に役立つと思う。</p> <p>レポートを課す講義</p> <p>レポートの課題などで、まだ苦手ではありますがとりあえず書き出すことができそうです。</p> <p>レポートや卒論を書くときに役立つと思いました。</p> <p>レポートを作るときなどに役立つと思いました</p> <p>レポートなどを、出す時</p> <p>論文を書く際など</p>	<p>論文を書くときなどにとても役立つと感じました。</p> <p>文書を書く時ここで習った事を思い出して行ければいいと思います。</p> <p>レポート書くとき役立つ</p> <p>レポート課題が成績となる全ての授業に役立つ</p>	<p>論文を書く際に役立つ</p> <p>他の授業で論文を作成するときに基礎日本語の内容を活かすことが出来ると思う</p> <p>レポート等を書く際。</p> <p>法学の意見表明文など</p> <p>レポートを書く際に役立つと思いました</p> <p>各授業のコメントペーパーなどでも、内容があり、かつ分かりやすい文章が書けるようになったと思います。</p> <p>レポートや試験の論述問題に活かせると思う。</p> <p>レポートや小論文など、学んだことを文章にまとめることが多いので、そういったときにとても役に立つと思う。</p> <p>各授業のレポートなど</p>
<p>文章表現技術</p>	<p>小論文の書き方を学んだのでほかの学修にも活かしていきたい</p> <p>レポートの書き方</p> <p>論理的思考力</p> <p>論理的に書くこと</p> <p>論理的な文章の書き方の骨組みを学んだので、他の科目でレポートを書く時のスピードが上がり、論点がブレなくなった。</p> <p>レポート作成時に、文書を論理的に書くことができるようになった。</p> <p>レポートを書く時に、文章の構成を考えて書けるようになった</p> <p>文章の構成を論理的に立てることはレポート等で使える知識である。</p> <p>文章の構成を重要視して書くことを深く学んだため、他の授業のレポートにも構成力をいかせる</p> <p>社会に出た時の日本語の使い方やレポート等の文の構成の仕方を活用できる。</p> <p>レポートを書く際の文章構成や推敲、あるいは引用文献の明記の仕方など</p> <p>レポートを書くときに推敲することや、伝わりやすい書き方をすることが役立つと思う</p>	<p>文章を書くことは日常でよくあることなので正しい書き方などが知れて良かったです。</p> <p>レポートで自分の意見を述べる際には基礎日本語で学んだことが役立つと感じた。</p> <p>レポートを書くときに、自ら問いを立て、それに対する反論を想定しながら、自身の意見を述べるといった、授業で学んだことが役立つと思った。</p> <p>日本語の表現力が非常に向上したと自覚できるので、他授業でのレポートや論述試験において、より論理的かつ正確な文章を書くことが出来ると思います。</p> <p>文章の構成は本当にうまくなりたかったので履修してよかった</p> <p>レポートを書く際の文章構成</p> <p>レポートや論文などでの引用文献などの示し方</p> <p>引用の示し方は大変、勉強になりましたので今後の大学生活に役立てたいと思います。</p> <p>引用文献の示し方はレポート課題のときに役立つように感じた。</p> <p>ちゃんとした根拠を示して文章を書く点</p>	<p>基礎日本語で学んだことを他の教科のレポートの書き方に応用できると思った。</p> <p>順を立てて文章を書くこと</p> <p>文章を論理的に書くこと</p> <p>他の授業のレポートを書くときに、きちんと筋立てて書くことができるようになった。</p> <p>レポート課題に活かせる。字数が多くなっても、構成は同じだから応用が効く。いただいた教科書も、今後また困ったことがあれば読み直して便利。</p>	<p>レポートの書き方</p> <p>論文の書き方、書くときの言葉使い</p> <p>レポートや卒業論文を正確な方法で書けるようになる</p> <p>文章を書くときに、注意すべきところがわかった。</p> <p>論理的思考とそれを表現する力は法学における文章構成に役立つ</p> <p>小論文の書き方についてです。特に段落の構成や起承転結をつけることなどを教わり、今までの自分の小論文がいかにか稚拙だったかを学びました。</p> <p>他の授業のレポートを書く際に、文章の構成が以前よりもしっかりとできるようになったし、文献の引用もきちんとできるようになった。</p> <p>文献の引用はレポートなどにも役立つと思う。</p> <p>レポートを書く際にこの授業で学んだ引用の仕方、使い方が役立つ</p>
<p>基礎的な漢字・語彙力</p>	<p>語彙力</p> <p>敬語は今後も使えるので学べてよかった</p> <p>四字熟語の知識があまりなかったので、小テストを機にたくさん知ることができた。</p>	<p>敬語</p> <p>正しい敬語の使い方</p> <p>敬語はどんな場面においても役立つと思いました。</p>	<p>日本語を使っている最中に正しい日本語を意識するようになった</p> <p>敬語の用法について</p> <p>敬語について改めて学ぶことができた。</p>	<p>敬語などの知識が身についた</p>
<p>その他</p>		<p>日頃の目上の人との会話</p> <p>人前で話す時や目上の人に対して話す時など</p>	<p>他の学習というか、バイトとか社会で役に立つと思いました。</p> <p>大学のレポートのみならず、社会に出て問題のない表現が身につくと思う。</p> <p>敬語を学べるので、日常生活や今後の就活に役立つと思う</p>	<p>ほかの学部の子と仲良くなる。</p>

アンケート結果:項番5の記述分析

項番5:「基礎日本語の授業で学んだことがほかの学修に役立つと思う点があれば述べてください。」

No. 3

カテゴリー/授業	授業I	授業J	授業K	授業L
文章作成への抵抗感の低減		小論文などの文章を書く抵抗がなくなった。もっと語彙等を増やしたいと感じるようになった  文を書くことに抵抗がなくなった		今までより文章が書きやすくなったと思う
文章作成スキル	基礎演習  レポートなど  レポートを書かされる時に基礎力が身に付いているので書きやすい  ほかの授業のレポート制作にとても役立つと思うし、実際役立つている。  作文の採点や小論文対策などに力を貸せることができそうである。  それぞれの科目のレポートを書くことレポート作成	レポートを書く時に役立つと思った  レポートを書くときに役立つと感じた。  レポートなどを作る際にこの授業で学んだことを参考にしたい。  他の授業でのレポートなど  卒業論文を書くとき  個人ワークでは文章作成能力が向上したこと。	レポートの作成  他授業の提出レポートのレベルの向上  全ての科目で役に立つと思う  他の授業のレポートや論文などにも役立つと思いました。  レポートを書くこと  レポート課題などの文章作成全般	レポートや論文を書く際に役立つと思った。  レポート等に役に立つと思いました  民法の論述問題などに使えると思う  漢文の授業で役に立つ
文章表現技術	他の授業の論文で正しい文章作成ができるようになる点  論文やレポートの作成に関して、大いに役立つ知識を得ることができた。  レポートを書く際にここで学んだ書き方などが役立つと思いました。  授業のコメントペーパーで正しく文章を少しは書けるようになった  小論文が論述問題の論理的展開に役立つ  一般的な小論文の構成が理解でき、構成を組み立ててから書く、ということができるようになった。  レポートなどで自分の意見を取り入れる時に根拠のある意見が書けるようになった。  引用の仕方を学んだので、レポート等でしっかりと引用することができるようになる。  小論文の課題や卒業論文のときに、文章の引用の仕方がわかったので、役に立つと思う。	文章を書くことは他の授業にも、レポートやレジュメ作成、他人に意見を述べる際など多岐にわたって役に立つことがあると思う。今回この授業で身につけた書き方や語彙を忘れず、これから活かしていきたい。  礼儀になかった文章の書き方を学べた点  レポートの書き方  論理的な文章の構成の仕方  レポートを書くときには、基礎日本語で習った文章構成の仕方と引用のやり方を参考にしています。  法学系の授業やテストにおいて論理的に文章をかける。  構成を考える事が多かったので、説明を求められた時に順序よく話せるようになったと思う。  文章の要点を簡潔にまとめられる点  引用の書き方は、レポートを書く際にも役立つことだと思います。  出典の書き方	論文の書き方  レポート提出の際の書き方  レポート課題の書き方にも役立つ学習だと思う。  レポートの書き方  文章力  違う授業でレポートを書くことがあり、そこで引用の仕方など役立つ。  引用の仕方に関しては今後幅広い範囲で使うことができると思う。  基礎日本語の授業で学んだ論文の構成や書き方で他の講義のレポートや論文が作りやすくなりました。  文章の構成を意識して文章を書けるようになったことは、他の授業でもレポートを書く際などに役立つと思う。	論文、レポートの書き方  文章の書き方がわかった  レポートやレジュメでわかりやすく発表するために役立つと思う  卒業論文を書く時わかりやすい文章が書けると思った。  文章要約  レポートの引用の書き方は使えました
基礎的な漢字・語彙力	語彙が増えたことで他のレポートも書きやすくなりました。  語彙力  語彙力が増えた  難読漢字やことわざ、四字熟語などが学べた  漢字がわかるようになった	語彙  語彙  語彙力  敬語はこれからも必要なことで自分の使っている言葉は正しい敬語ではないと学んだ  四字熟語や漢字の演習が役に立った	日本語力が上がる  正しい日本語の使い方  文章力はもちろん授業前の小テストでの語句の問題などを通して語句の知識を増やすことが出来ました。  小テストで国語力が身についたため、日常会話での表現の仕方、レポートが増えた  敬語	日常生活でのボキャブラリーが増えた。  ことわざを沢山知ることができた  正しい敬語を確認できて、これから役に立つと思います。  漢字などは日常生活に役立つと思いました  漢字
その他	コミュニケーションの取り方  敬語などを学び、これから社会に出て使える言葉つがいを改めて知ることができた。  これからの社会で文章を使う際に役に立つ力が身についたと思う	今後の就活  グループワークでは協調性		手紙を書いてみようと思いました。

アンケート結果:項番5の記述分析

項番5:「基礎日本語の授業で学んだことがほかの学修に役立つと思う点があれば述べてください。」

No. 4

カテゴリー/授業	授業M	授業N(小人数)	授業O	授業P
文章作成への抵抗感の低減	レポートへの抵抗感がなくなった。			
文章作成スキル	レポートなどの時に役立つ  レポートや卒論で役に立つと思いました。 レポートなどで論ずる場合、全ての科目において役立つと感じた。日常生活にも役立つ。 レポートを書くときに役に立つと思った		レポートは大半の授業で書く機会があるので、これから文章を書くのにとでも役立つと思います。  試験のレポート  小論文などに役立つと思う。  法的意見表明文  法学部でのレポートが書きやすくなった 卒論 卒論	レポート  課題でレポートが出た時などこの授業の内容は役立つと思う。  他の授業のレポート等を書くときに役立つと思います  論文やレポートを書く際に役立つ。既に今期のレポートに役立っている。  ゼミなどの資料作成で役立つと思った 法学の科目での記述
文章表現技術	小論文を書く上での基本的なルールを学ぶことができた  他の授業で書くことになる小論文の書き方がわかる点。  小論文を書く力がつきました。千字の小論文をかくにあたって、文献を探して引用文を使い、自身の意見を述べる事など、ためになることでした。また、推敲をして何度も修正するうちに、完成度が高まっている実感がわきました。  卒業論文やレポートを作成する際に文章の構成を意識して行う  参考文献の提示の仕方や、文章の構成の仕方  引用の仕方がわかりました  手紙の書き方は参考になると思いました		書き方が分かったことで、レポートが書きやすくなりました。  論文の書き方がわかったおかげで、ゼミのレポートなどが書きやすくなったのではと感じる。  文の書き方などを身につけられる  文章の構成をレポートに生かせようと思いました。  レポートなどを書く時に、文章の構成がよくわかった。  論理的かつ文章を構成する力が身についたと思う。反対の意見を予想をしそれに対する反論を考えるなど先を見据えた文章力に役立った  他の授業では文章の要約をする時に役に立つと思う  レポートを書くときに大変役に立つと実感した。引用を今まで丁寧にしてこなかったが、気をつけてやるようになった。	正しい文章の書き方  文を書く力  他の授業でもレポートを書く機会が多いのでその時に基礎日本語で学んだ、文章の書き方が活かせると思う。  他の授業でレポートや論文を書くときに、テキストを見ながら作成できると思う  メールの送り方やレポートの書き方  レポートや論文作成にあたり応用できる知識が身に付いた  文章の書き方が他の学修に役立つと思いました。  文章を論理的に書く  論文などを読んだ時に自分の意見を持てる。  文章がどうしてもごちゃごちゃしてしまうので形式に乗っ取るのは大切だと思いました。  正しい引用の仕方
基礎的な漢字・語彙力	言葉使いができるようになることで  語彙が増えた 漢字を毎週テストすることで、四字熟語や諺を多く知る	敬語やメールの正しい文の書き方など、教養としての文章を学べたことは今後に大いに役に立つと思った。	語彙  個人の語彙力向上  日本語の基礎を学んだので他の勉強に全て役に立つ  語彙も少しは増えた  敬語は日常生活にも役に立つと思いました。  敬語やメールの書き方はこの先でも役に立つと思います。  日常生活において敬語を用いる時	日本語力  レポートなどを書く際の語彙力が増えた  語彙の知識
その他			日常生活で必要となるマナー 暗記能力の向上	日常生活に役立つと思う 普段の日常生活でのやり取りなど 敬語などを学び、人間関係を形成する力を養うことができた。

## 参考資料



## 〈資料 1〉平成 28 年度「学部 FD 推進事業」について（案）

（平成 27 年 11 月 18 日開催第 7 回教育開発センター委員会資料）

### 平成 28 年度「学部 FD 推進事業」について（案）

本学では 2012（平成 24）年度より学部 FD 推進事業を実施し、教育内容・方法等の改善を図るための組織的な研修・研究の機会を提供・実施してきた。当該事業は先の認証評価でも比較的高い評価を得たと言われている。しかしながらこれまでのセンター委員会の議論でも明らかなように、課題が散見されることもまた事実である。そこで以下では、これまでに指摘された検討課題を確認した後、平成 28 年度以降の学部 FD 推進事業について、①申請書の形式の改定、②成果の共有・検証と学外への情報発信、の 2 点から具体的な改善案を提示したい。

#### 1. これまでに出了検討課題

- 各事業成果について、学部及び全学での周知・共有を強化
- 学部内で必ず事業効果の検証を実施（アンケート等）
- 学外への成果発信（紀要への掲載、報告書の作成、Web 公開）
- 各学部で FD 事業の推進を担う担当教員の育成（長期的視点からの検討）
- 申請書の形式の変更（PDCA サイクルの徹底等）

#### 2. 改善案

##### ①：申請書の形式の改定

【改定の意図】これまでの「学部 FD 推進事業」申請書では、事業の概要（計画期間全体）として、「目的」、「内容」、「計画」、「期待される効果・達成目標」の 4 項目を記入した。しかしこれらの項目では、

- ① 当該事業の実施方針や実施状況の振り返り、成果の検証というプロセスが不十分であること
- ② 当該学部の授業改善にどのような影響を及ぼすかが不明瞭であること
- ③ 当該事業の成果が学部学科を超えて本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果（汎用性）をもたらすのかが明らかでないこと

という課題があった。そこでこれらの点を勘案するとともに、本事業が PDCA サイクルを自覚的に踏まえつつ企画・運営されていることを明らかにするため、以下の様に申請書の形式を改定することとする。なお申請する事業は、原則として単年度で完了するものとして想定されるが、他方で「教育内容・方法等の不断の改善」という視点から、単年度での予算措置及び申請書作成が求められるものの、1 年を超えることを想定した事業計画を策定することも可能とする。ただし最長で 2 年とする。

改定 (各 400 字程度)	現状
<p>○目的 (P) : 現状認識を踏まえた事業の目的</p> <p>○内容 (D) : 目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。</p> <p>○計画 (P) : どのような計画で、当該事業を実施するのか。</p> <p>○点検・評価 (C) : 本事業の実施状況並びに成果を、どのように点検・評価するのか。</p> <p>○改善・期待される効果 (A) : 今後の当該学部の教授法や授業改善にどのように役立つことが想定されるか。具体的に記述して下さい。</p> <p>○汎用性 (V) : 成果を全学で共有することで、当該学部学科を超えて、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善にどのような効果をもたらすことが想定されるか。* <i>V = versatility</i></p> <p>○経費の妥当性・必要性 : 教育研究経費支出、人件費支出、設備関係支出について、申請する事業計画と関連して妥当性と必要性を記述して下さい。</p>	<p>○目的</p> <p>○内容</p> <p>○計画</p> <p>○期待される効果・達成目標</p>

## ② : 成果の共有・検証と学外への情報発信

【改定の意図】申請書の形式を改定しただけでは、各学部の事業成果の共有とはならない。そこで事業成果を確実に学部間で共有させ、かつ汎用的な成果については、本学学士課程教育全体または本学教員の職能改善に結びつけるためにも、成果を共有する機会を設けたいと考える。具体的には「成果報告会」(仮称)を開催し、各学部長ならびに実務担当者を必須の参加者として、広く本学専任教職員に参加を求めることとする。これにより学部での成果(タテ)が、確実に学部間で共有できる(ヨコ)と考えられる。あらかじめ申請書に記載した「汎用性(V)」の観点からの議論も行うことで、より実りある議論も期待できよう。具体的な開催日時や内容については、今後、本センター委員会にて検討しなければならないが、現状での方向性は以下のとおりである。

名 称 : 成果報告会 (仮称)

日 時 : 年 1 回。年度末実施

参加者 : 各学部長・実務担当者ならびに本学専任教職員

内 容 : ①当該年度の学部 FD 推進事業の成果報告会 <学部の Good Practice の共有>

②各学部汎用性(波及効果)についてのディスカッション<本学学士課程教育全体への寄与>

\*申請書に *V = Versatility* を記入して頂くことで、ディスカッションの共通議題を予め設定

\*成果報告会の議論については、報告書等を作成し機構 HP にて公開

備 考 : 2 年に 1 度は、隔年で開催される教育開発シンポジウムと関連付けることも可能

また関連企業(インテージ、丸善等)や関東圏 FD(※)との連携も検討課題

例 國學院大學教育改善カンファレンス(仮称)と銘打って・・・



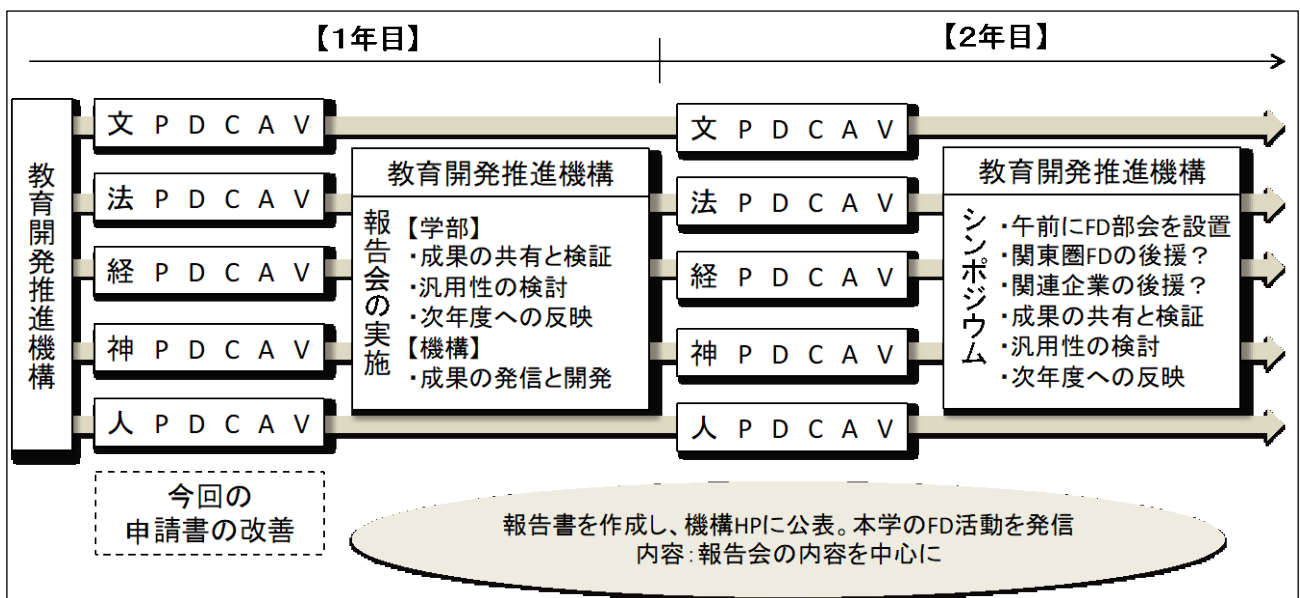
午前：成果報告会

午後：教育開発シンポジウム

※関東圏 FD：法政大学、立教大学、東洋大学、青山学院大学の FD 活動に携わる教職員にて構成される組織的な FD コンソーシアム。本学は今年度より参加。初回会合日は、2015 年 11 月 25 日。

注意：事業によっては「期待どおりの成果が出なかった」・「事業計画に無理があった」というケースが発生することも考えられる。この場合は Good Practice でなくても、その知見を共有すること自体が有益であると考えられるが、学外への公表（報告書等）については、様々な点から検討する必要がある。したがってこの点については、引き続き教育開発センター委員会での検討事項とする。

### 【平成 28 年度以降の「学部 FD 推進事業」のモデル】





## 〈資料2〉 國學院大學FD推進事業の助成に関する規程

(平成29年2月8日開催第7回教育開発センター委員会資料)

### 國學院大學FD推進事業の助成に関する規程

平成28年12月7日  
制 定

#### (目的)

第1条 この規程は、教育開発推進機構規程第2条及び教育開発センター規程第2条に基づき、本学のFD推進事業を助成するために、必要な事項を定める。

#### (定義)

第2条 この規程におけるFDとは、学士課程における教育及び学修の効果を高めることを目的とし、かつ以下の各号のいずれかに関わる取組みをいう。

- (1) カリキュラムの改善又は体系化
- (2) 教育を行う組織及び学修環境の整備
- (3) 教員の教育力開発
- (4) 授業の内容及び方法の工夫改善

#### (助成対象)

第3条 この規程に定める助成(以下「FD推進助成」という。)の対象は、学部単位で企画、実施する学部FD推進事業(以下「甲」という。)又は2名以上のグループが行うFD推進事業(以下「乙」という。)とする。

- 2 甲の対象は、各学部において機関決定を経た取組みとする。
- 3 乙の対象は、主に前条第3号又は4号に関わる取組みとする。

#### (申請資格)

第4条 FD推進助成を申請できる者は、本学専任教員とし、甲の申請者は学部長とする。ただし、事業推進の協力者に兼任講師又は職員を含めることができる。

#### (実施期間)

第5条 FD推進助成の実施は、原則として単年度とする。ただし、内容により最長2年の事業計画を申請することができる。

(申請手続)

第6条 FD推進助成の採択を希望する者は、実施する前年度の1月末日までに、別に定める申請様式に従い、計画調書を教育開発センター長宛に提出しなければならない。

(審査)

第7条 FD推進助成の審査は、別に定める審査基準に基づいて教育開発センター委員会が行い、審査結果に基づき、学長が採択を行う。

(助成金)

第8条 甲に対するFD推進助成金の上限は、1件あたり年間100万円とする。

2 乙に対するFD推進助成金は、採択する取組みの合計が予算内に収まるように調整する。

3 助成金の使途の範囲及び取扱いについては、別に定める。

(設備備品等)

第9条 FD推進助成により購入した設備備品は、大学に帰属する。

(成果の報告、共有及び発信)

第10条 FD推進助成に採択された者は、次の各号に掲げる義務を負う。

(1) 成果検証に基づき、採択された年度の3月末日までに学長へ成果報告書を提出すること

(2) 学内における取組み情報の共有に努めること

(3) 取組みの状況及び成果を学外へ発信すること

(事務)

第11条 FD推進助成金の運用に関わる事務は、教育開発推進機構事務課が行う。

(改廃)

第12条 この規程の改廃は、教育開発センター委員会及び教育開発推進機構運営委員会の議を経て、学長が行う。

附 則

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

### 〈資料3〉平成29年度「FD推進助成（甲・乙）成果報告会」開催状況（報告）

（平成30年2月28日 第5回教育開発推進機構運営委員会資料）

國學院大學FD推進事業の助成に関する規程第1条に基づき実施する、本学FD推進助成事業の取組成果を、広く学内教職員が共有し、本学学士課程における教育及び学修の効果を高めることを目的として、以下の日時・会場で「成果報告会」を開催した。当日の発表内容や知見は、該当する個人及び団体の同意を得た上で、各種広報や外部の学術コミュニティの場で、その成果を学内外にて共有・発信する予定である。

日時：平成30年2月21日（水）16:00～18:00

会場：渋谷キャンパス1号館4階1403・1404教室

---

#### 【分科会A（1403教室）】学部FD推進事業（5件）＊1件あたり発表15分＋質疑応答5分

司会 戸村理（教育開発推進機構助教）

- 16:00～16:05 司会説明
- 16:05～16:25 文学部「カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討」  
＊吉岡孝教授
- 16:25～16:45 法学部「法学部における新カリキュラム導入に向けた初年次教育の手法の研究」  
＊安田恵美専任講師
- 16:45～17:05 経済学部「基礎演習A・BにおけるFA制度を用いた授業改善」  
＊星野広和教授
- 17:05～17:25 神道文化学部「学生に対する効率的なアンケート・学力調査による授業運営・学部運営の改善化」  
＊遠藤潤准教授
- 17:25～17:45 人間開発学部「「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発—学校インターンシップの現場と課題の把握—」  
＊神事努准教授
- 17:45～18:00 総合意見交換

---

#### 【分科会B（1404教室）】グループによるFD推進事業（3件）＊1件あたり発表20分＋質疑応答5分

司会 小濱歩（教育開発推進機構准教授）

- 16:00～16:05 司会説明
- 16:05～16:30 学部・学科横断型「学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発」  
＊成田信子教授
- 16:30～16:55 神道文化学科「神道教化関連授業の改善およびアクティブラーニング化にかかる教材開発事業」  
＊藤本頼生准教授
- 16:55～17:20 経済学部「アクティブラーニング型授業における教員と学生との間の教育成果のギャップの確認およびルーブリックの作成」  
＊根岸毅宏教授
- 17:20～17:45 総合意見交換

---

#### 〔備考：開催結果について〕

- ・参加者のべ44名（実質参加者数は教員31名・職員5名）
- ・会場で実施したアンケートでは、取組み自体については評価の声上がる一方、①発表時間が短く、十分な説明や質疑応答ができない、②参加者数が少ないため一層の全学的呼びかけが必要である、との指摘がなされた。
- ・平成28年度同様、本年度「成果報告会」の配付資料等も、学部・グループの確認と同意を経た上で冊子体に編集し、学内共有ならびに大学ウェブサイトにて一般公開を行い、FD推進の取組み内容の紹介と知見の共有を図る予定である（なお、学部・グループによって、学外公開不可とする資料が含まれている場合は、担当者に確認の上、適宜配慮して作成する）。

以上



〈資料4〉過年度事業一覧（平成24～28年度）

平成24年度 学部FD推進事業

項目	詳細
申請学部	文学部
事業名称	導入教育及び初年次教育科目の授業改善
申請者	野呂 健
実務担当者	石川則夫
申請額	1,000,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部教育における本格的PDCAサイクル始動のための準備作業
申請者	宮内靖彦
実務担当者	荏田真司
申請額	898,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	4年間を見通した教育改善を目的とした学生による主観的な学修の達成度に関する調査
申請者	尾近裕幸
実務担当者	田原裕子
申請額	1,000,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	アンケートの実施の簡便化による授業運営、学部運営の向上プログラム
申請者	石井研士
実務担当者	西岡和彦
申請額	542,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発
申請者	新富康央
実務担当者	堀江紀子
申請額	1,000,000 円

\*総額 4,440,000 円

平成 25 年度 学部 FD 推進事業

項目	詳細
申請学部	文学部
事業名称	授業改善及びカリキュラム改訂の基本方針策定
申請者	野呂 健
実務担当者	矢部健太郎
申請額	1,000,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部教育における本格的 PDCA サイクルの準備作業
申請者	宮内靖彦
実務担当者	佐藤秀勝
申請額	999,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	在学中の学修達成度と教育改善に関する意識調査
申請者	尾近裕幸
実務担当者	本田一成
申請額	1,000,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	アンケートの実施の簡便化による授業運営、学部運営の向上プログラム
申請者	石井研士
実務担当者	西岡和彦
申請額	563,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発
申請者	新富康央
実務担当者	柴田保之
申請額	490,000 円

\*総額 4,052,000 円



平成 26 年度 学部 FD 推進事業

項目	詳細
申請学部	文学部
事業名称	授業改善及びカリキュラム改訂の基本方針策定
申請者	野呂 健
実務担当者	柴田紳一
申請額	1,000,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部教育における本格的 PDCA サイクルの成果検証およびアクティブラーニング導入に関する基礎的研究
申請者	宮内靖彦
実務担当者	佐藤秀勝
申請額	999,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	導入教育における主体的な学びの促進
申請者	尾近裕幸
実務担当者	本田一成
申請額	987,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	アンケートの実施の簡便化による授業運営、学部運営の向上プログラム
申請者	石井研士
実務担当者	西岡和彦
申請額	1,000,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発
申請者	成田信子
実務担当者	柴田保之
申請額	902,000 円

\*総額 4,888,000 円

平成 27 年度 学部 FD 推進事業

項 目	詳 細
申請学部	文学部
事業名称	授業改善及びカリキュラム改訂の基本方針策定
申請者	野呂 健
実務担当者	白井重範
申請額	648,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部教育における本格的 PDCA サイクルの成果検証およびアクティブラーニング導入に関する基礎的研究
申請者	宮内靖彦
実務担当者	川合敏樹
申請額	700,000 円
申請学部	経済学部
事業名称	リーダーシップ教育を行うための能力とスキルの獲得
申請者	尾近裕幸
実務担当者	宮下雄治
申請額	1,000,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	アンケートの実施の簡便化による授業運営、学部運営の向上・改善化プログラム
申請者	武田秀章
実務担当者	遠藤 潤
申請額	600,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発-教育実習・保育実習に焦点をあてて-
申請者	成田信子
実務担当者	伊藤英之
申請額	540,000 円

\*総額 3,488,000 円

平成 28 年度 学部 FD 推進事業

項 目	詳 細
申請学部	文学部
事業名称	カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討
申請者	野呂 健
実務担当者	金杉武司
申請額	800,000 円
申請学部	法学部
事業名称	法学部におけるアクティブラーニング導入および初年次教育手法の研究
申請者	宮内靖彦
実務担当者	川合敏樹
申請額	797,600 円
申請学部	経済学部
事業名称	基礎演習 A・B における外部評価を通じた授業改善
申請者	尾近裕幸
実務担当者	細井 長
申請額	1,000,000 円
申請学部	神道文化学部
事業名称	学生に対する効率的なアンケート・学力調査ならびに有識者の外部評価による授業運営・学部運営の改善化
申請者	武田秀章
実務担当者	遠藤 潤
申請額	798,000 円
申請学部	人間開発学部
事業名称	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発
申請者	新富康央
実務担当者	伊藤英之
申請額	969,500 円

\* 申請総額 4,365,100 円



## 平成 29 年度 教育開発センター委員

- (委員長) 柴崎 和夫 教育開発推進機構長・教育開発センター長  
仙北谷穂高 教育開発センター副センター長・教育開発推進機構事務課長  
大久保桂子 共通教育センター長・教務部長  
青木 豊 文学部教授  
安田 恵美 法学部専任講師  
中馬 祥子 経済学部教授  
遠藤 潤 神道文化学部准教授  
神事 努 人間開発学部助教  
新井 大祐 教育開発推進機構准教授  
小濱 歩 教育開発推進機構准教授  
戸村 理 教育開発推進機構助教  
原田 佳昌 教育開発推進機構事務課次長  
佐野 真之 教育開発推進機構事務課主任（～平成 29 年 9 月 30 日）

\* 職名は平成 29 年度

平成 29 年度

FD 推進助成（甲・乙）事業 成果報告書

編集・発行 國學院大學 教育開発推進機構  
教育開発センター

平成 30 年 9 月 1 日

